

CoReCa

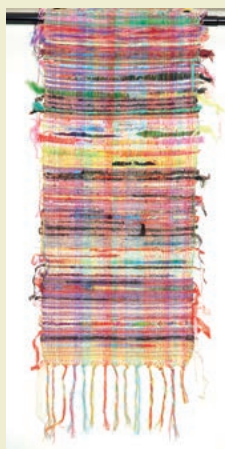
2022
2023
事業報告



CoReCa 2022-2023

目次

- 2 評議員会長ごあいさつ
- 3 理事長ごあいさつ
- 4 TJFのビジョンとミッション
- 6 学校のソトでうでだめし
テンダーさんの「その辺のもので生きる」
オンライン講座
- 20 多言語・多文化交流「パフォーマンス合宿」
PCAMP地域版を広島からスタート
- 28 地球講座
同じ惑星に共に在る
- 34 パフォーマンス合宿(オンライン版)×地球講座
地球とわたしのつながり
- 38 ときめき取材記
人と向き合い、物語を紡ぐ
- 41 2022年度実施事業一覧
- 42 TJFを支援してくださっている方々
- 43 組織
- 44 財団概要
- 45 事務局長交代のごあいさつ



表紙の全面に広島の社会福祉法人ひとは福社会「就労センターあっぷ」さんに織っていただいた「さをり織」を使用しました。城みさをさんが始めたさをり織は、織り方や糸の種類などに決まりはなく、感じるままに自由に織るものです。差を織り、新しい価値を生み出すさをり織に、TJFの新しいビジョンを重ねました。



評議員会長
野間省伸

”ダイバーシティ実現に向けての一步“

世界はいま急速に変化しています。テクノロジーが進化して、グローバル化の流れは止まりません。TJFが改めてビジョンとミッションを定めたことは、時代の変化に対応していくためにも、非常に有意義なことだと思います。

このビジョンのなかで、私が注目しているのは「多様(性)」―ダイバーシティということばです。世界にはさまざまな価値観、さまざまな文化、さまざまな個性が混在していて、社会は混沌こんとんとしていきます。実際に現地の人びとと交流したり、直接見たり聞いたりすることは非常に重要なことだと思います。

私は昨年海外出張で2週間ほどアメリカに滞在しました。サンフランシスコはシリ

コンバレーに代表されるIT企業が多数集結している街ですが、一方で貧困問題が深刻で、路上生活者が急増していました。犯罪が増えすぎたため、カルフォルニア州では、950ドル以下の窃盗は軽犯罪に分類され、逮捕されないそうです。また、現地では自動運転タクシーの有料営業が始まっていて、私も実際に利用しましたが、無事目的地に到着することができました。ところが、私が利用した会社は事故が原因で、営業許可は取り消されてしまいました。日本の感覚では、あり得ないことだと思います。しかし自分には理解できないと思っただけではありません。

重要なのは「相互理解」と「共通理解」です。自分とは違う常識やルールのなかで生活する

ることは大変なことです。生まれも育ちも違う人たちとわかり合うことはとても難しい。どうすれば相手のことを理解したり、共感したりできるのか。教科書やインターネットの情報だけでは、お互いを理解することはできません。やはり、現地の人びとと直接会って、その国や都市の雰囲気をも自分自身で感じる

ことが大切だと思います。人と人が文化交流をすることで相互理解と共通理解が生まれます。そんな活動がダイバーシティを实践する第一歩となると思います。

国際的に見ると、なんとなく最近の日本は元気がないように思われています。でも日本の技術はまだまだ進んでいるし、優秀な人材も多い。

若い人たちには「やるべきことはたくさん残っている」とエールを送りたいと思います。TJFの活動に携わるすべての皆さまの一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

TJFは、2022年に創立35周年を迎えたのを機に、新たなビジョンを策定しました(4ページ)。ビジョンを新しくした背景には、社会の多様化が急速に進むなかで、これまでのように言語や文化に注目しているだけでは現実に対応しきれないのではないかなという私たちの課題意識があります。

近年、地域社会や企業で、ダイバーシティということばがよく使われるようになりましたが、これは今を生きる人びとの背景が極めて多様化している現状を反映しています。ダイバーシティとは、性別、年齢、国籍、人種、民族、文化、宗教、障害、性的指向、学歴、社会階層などを理由とする差別をなくすことはもとより、すべての人が互いの背景の違いを

認め合い、自分らしく、いきいきとした人生を歩める社会の実現をめざすものです。現実社会では、前述したような属性はそれぞれ切り離されて存在しているとは限りません。むしろ、ひとりの人やひとつのコミュニティにおいて、複数の属性が相互に関わり合い、複雑に交差していることがわかっていきます。そのため、これらの属性を個別に扱うのではなく、包括的にとらえる視点が重要視されるようになりました。さらには、各属性のなかにもまた多様性があることに目を向けていく必要があります。社会の現実を多層的にとらえていくためには、多様性の急速な進展とともにこうした「交差性」と「多様性」のなかの多様性」を視野に入れていくことが不可欠と

なっています。

TJFはこうした時代認識のもと、すべての人が自分らしく、いきいきとした人生を歩めるような社会づくりへの貢献をビジョンとして掲げることになりました。新たなビジョンのもと、特に若い世代が希望をもって生きていけるような社会の実現に向けて努力してまいります。

また、ビジョンをTJFの今後のあり方や活動に反映させるために、「対話から共通理解へ」「協働から共創へ」「対等な関係性の構築へ」という三つのミッションと各ミッションを具現化していくための指針をつくりました(5ページ)。「対話」や「共創」が成立する前提には力による支配ではなく「対等な関係性」が必要ですが、「対等な関係性」は「対話」や「共創」を試みるなかでこそつくられていくものでもあります。

理事長
佐藤 郡衛

”若い世代が希望をもつて生きていける社会をつくる“

TJFは2023年度より5年間をめぐりに、これらのミッションを事業と組織運営において達成するべくチャレンジしていく所存です。より一層のご支援、ご協力をお願いいたします。



Mission

TJFの使命

対話から共通理解へ

- 自分と対話し、考えを明らかにし、他者に伝える
- 相手の考えを聞き、互いのやりとりを通して、考えや意見の質を高めていく
- 互いが納得できる了解点を導き出す
- 共通の目標に向けて行動する

協働から共創へ

- 既存の枠組みをクリティカルにとらえる
- 多様な人たちがそれぞれの得意技を出し合う
- 自分たちの限界点を突破し、新たな知や価値を創り出す
- 創り出したものに社会的な意味付けを行う

対等な関係性の構築へ

- 自分で自分のことを承認する
- 自他の置かれている環境や状況を知る
- 互いの自立と自由を守るために必要な距離感覚やことばの力を身に付ける
- 新たな関係性を構築する

Vision

TJFがめざすこと

多様な背景をもつ人たちとともに
すべての人がより自由に
より対等に生きられる世界を創り
未来につないでいきます。

テンダーさんの「その辺のもので生きる」オンライン講座

本講座は2021年2月にスタートし、火起こし、3D設計、雨水タンク製作、鋳造などの技術を扱ってきました。2023年3月に終了するまでに14講座を実施し、国内外の中高生及び教育に関心のある方たち延べ415人が参加しました。2022年度事業の報告とともに、講座全体の締めくくりとして、参加者へのインタビューとTJFの振り返りを掲載します。

当たり前を変えよう、大切なものを守ろう

2022年度は、「鉄工を身につけて強力なストープを作ろう」「交渉を学び、ころざしを護る」など5講座を実施しました。そのうち、最終回の様子をご紹介します。

自分の実践に責任を負う

最終回は、参加者の皆さんが、これまでの講座で扱った技術のなかから自分が選んだものを1カ月間実践したうえで、オンライン講座の場を集まりました。

この企画を考えるうえで、講師のテンダーさんから提案があったのは、「講師がいなくなると取り組みをやめる問題」を乗り越えるデザインでした。テンダーさんは、ワークショップに参加して「今までいちばん面白い内容だった」と満足しても、講師がいなくなると実践をやめてしまう人を多く目にしてきたそうです。こ

れは、テンダーさんに限らず、TJFの事業を振り返っても思い当たる節がありました。そこで、テンダーさんが言及したのは、「講師から習う」というしつらえに原因があるのではないかとということでした。「講師から習う」という場のデザインやマインドセットだと、往々にして「講師の存在」が何かをする動機になるので、講師がいなくなると実践をやめてしまう。だとしたら、「講師から習う」から「自分で自分の実践に責任を負う」に移行するようなデザインができれば、講師がいなくなっても実践を続けられるのではないかと。最終回の企画の背景には、そういう仮説がありました。

そこで「1カ月間自分で決めたテーマを実践する」ことのほかに、DiscordというSNSにつくった参加者コミュニティに、「自分の名前のつ

いたチャンネルをもつ」最初に、自分の現在地と1カ月後に到達したいゴールを宣言する「日々の実践を自分のチャンネルで発信する」ことにしました。年度末に1カ月も実践を続けるというハードルの高い設定にもかかわらず、18人の方がエントリー。システム思考や交渉、ドラ

【事業データ】

テンダーさんの「その辺のもので生きる」オンライン講座
講師、企画及び広報への協力：テンダー

第9回「鉄工を身につけて強力なストープを作ろう」
期日：2022年6月5日(日)
サポーター：井上美優、大船ちさと、岡崎大輔、岡田香織、堀江真梨香、松尾郷志
参加者：33名

第10回「きみのためのエネルギー。実用パラボラソーラークッカーを作って太陽熱で調理する」
期日：2022年8月21日(日)
サポーター：井上美優、大船ちさと、岡崎大輔、都築藍、堀江真梨香
参加者：27名

第11回「交渉を学び、ころざしを護る」
期日：2022年10月2日(日)
サポーター：井上美優、堀江真梨香
参加者：45名

第12回「生き物の輪に戻るためにドライティレを作ろう」
期日：2022年12月25日(日)
サポーター：井上美優、堀江真梨香
参加者：22名

第13回「当たり前を変えよう、大切なものを守ろう」
期日：2023年3月26日(日)
サポーター：石川潤、井上美優、大船ちさと、ブランド那由多、堀江真梨香
参加者：実践参加者18名、講座当日参加者15名
*参加者はイギリス、スイス、タイ、日本、フィリピン、ベルギーから参加

講座当日は、まずテンダーさんが、1カ月の実践の意味は何だったのかについて話をしました。



車輪は再発明しよう

皆さんの実践を見てきて、考えさせられること、学ぶことがたくさんありました。まず、これまでの講座で扱った技術から一つを選んで1カ月実践することの意味は何だったのか。それは「車輪の再発明」だと思っています。車輪は人類の重要な発明の一つ。車輪のように「すでにほかの誰かが発明していて、広く人類に寄与しているものを、改めて発明してしまうこと」を、「車輪の再発明」と言います。長い年月を費やして、ある日、「すごい、ひらめいた！丸くてさ、こうやって物を簡単に運べるの！車輪って名前にしようと思う」と。それを聞いた人は、「いやいや、車輪知ってますけど」となる。「それは大変な無駄だから、ちゃんと先行事例を調べましょうね」というのが、特許とか開発の世界でよく言われる話なんです。でも、「人類にとって重要な発明の一つを再発明したらすごいじゃないか」と思うんですよ。自ら車輪を再発明した人と、「これ

車輪。便利だよ」と言われて使う人では、車輪というものの理解がまるで違う。その深い理解は、おそらく、ほかのことにもつながっていく。車輪の再発明のようなことがとても大事なことです。なぜなら、**人生は共有できないから。他人の経験を自分のものにすることはできない。**「自分で再発明をする」ことで詳しくなる。それが自分の人生の糧になる。しかも、まったくのゼロから始めるわけではなくて、発明の方法は古文書とかに書いてあって、それを読みながら試せるわけです。そういうことを、皆さんに追体験してもらえたらと思っています。

コヨーテ・ティーチャー

27歳のときにアメリカのトラッカー・スクールという北米先住民技術の学校に行っていたんですけど、そこで「コヨーテ・ティーチャー」ということばを知りました。コヨーテ・ティーチャーは、何かに頑張って取り組んでいる人の数歩先にヒントをちょこっと置いて消えちゃう先生。直接教えてはくれないんだけど、「ああ、できない、できない」と言っていると、先のほうにちょこっと何か置いてくれる。「何かこれ？ 何に使うの？」って、最初は意味がわからない。でも、やり続けていくと、

「もしかして、これはこういうことなんじゃないか？」とわかったりする。それを繰り返していくんです。トラッカー・スクールで火起こしという伝承の存在は知ったけど、教えてもらってはいないの。ヒントを目の前に置かれただけ。日本に帰ってから、自分で1年間練習しました。

その後、脳科学やシステム思考を学んで改めて考えたんだけど、人は答えを与えられると報酬系ホルモンのドーパミンが出ないんです。例えば、全26話の連続ドラマの1話めで犯人がわかったら、残り25話は見ないでしょう。答えを与えられたらその人の興味が失われてしまう。だから、「ヒントが目の前に置かれて、ヒントまで歩いていくのも本人。ヒントを拾うのも本人。それが何にはまるのか考えるのも本人」とならないと実践は深まらないんだと思ったの。というのが、この1カ月の実践の種明かしでした。

ルーティンを切り崩せたか

これもトラッカー・スクールの教えで、「ルーティンをつくるな」というのがあります。例えば、「Aの道を来たら、帰りはBの道を行く」「ふだんドタドタと歩くなら、音を立てずに歩いてみる」。「ルーティンを意図的に壊せ」、つまり「同じことを繰り返すな」と言われるんですよ。人間の脳は、考えることを少しでも減らして楽をしたいから、瞬間的に自動処理に切り替わる特性があります。歩き方、箸の持ち方、物の拾い方……。考えるこ

とを一つでも減らしたいから、「えーい、自動スイッチ、オン」となって、ルーティンに入っちゃうのね。でも、皆さん、この1カ月で身をもって体験されたと思うんですけど、ルーティンは深まらないですよ。同じことを繰り返しても何も上達しない。何かを変えて試してみることがやっとなかなくと上達しないんです。数をこなすということではなくて、「検討して変更する」ということ。自分の実践のなかでルーティンを切り崩せたかどうかというのは、ちょっと気にしてみてください。切り崩せなかったルーティンがあったら、「それって何なんだろうか」を、ぜひ考えてほしい。自分の人生にとって変更できないほど強いルーティンって何なのかを。

講師
テンダー

環境活動家。2023年3月まで鹿児島で生態系の再生と廃材利用のための市民工房「ダイナミックラボ」(https://sonohen.life)を運営(現在は個人研究所に移行)。システム思考、非暴力コミュニケーション、先住民技術、適正技術等の人類の叡智(えいち)を核に、考え、実践・実現し、伝えることを繰り返している。著書に『わがや電力12歳からとりかかる太陽光発電の入門書』(https://yohoho.jp/wagaya)がある。

1ヵ月の実践の共有

テンダーさんのお話のあと、参加者の皆さんはグループに分かれ、それぞれの実践の内容と考えたことを、Discordに書きためた記録を画面で見せながら共有し合っていました。

当日グループ内で共有された皆さんの実践は、個々の生活に必然性のあるものだったこともあり、プライベートな内容が多く含まれます。ここでは、掲載を許可して下さったお二人のDiscordの投稿の一部をご紹介します。



春さんの実践

春さんはロープワークに取り組みました。最初の実践プラン発表から最終日までの経過を抜粋してご紹介します。

■実施期間：2月15日～3月23日

■現在地点：

- ロープワークを練習せねばとロープやわら縄を購入したが、触ってもいない。
 - せっかく覚えた結び方も日常使いをしないのですぐに忘れてしまう。
 - 使う場面があっても、結局は今までやっていた固結びなど、頭を使わなくてもできる方法で無理やり済ませてしまう。
- めざす地点：
- 漁師に転職したいので、漁師必須の技術であるもやい結びとトラッカーズヒッチを完璧に覚える。
 - 講座で紹介されていたようにロープワークを駆使してテントを張る。
 - わらを使って足半(あしな)かわらじを作り、それで通勤をする。

■7日め

本日は足半作りに挑戦。身近に生えている自然繊維を見つけることができているので、市販のわら縄を使う。復習動画を何度も再生しながら足半作りを進める。

・気がついたこと

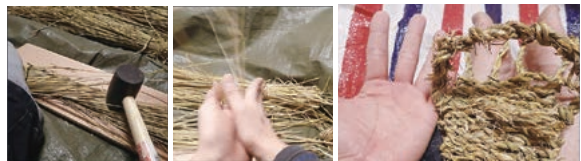
足半の幅を手のひらの幅くらいにする。横幅はゆるく絢(な)う。縦幅は時折指で締めて目が詰まるようにする。

・できるようになったこと

作り方が理解できてきたので、途中で問題が見つかっても元の状態に戻し、修正をかけることができるようになってきた。

■22日め

朝早く起きて清々しい空気のなか、足半をひと編み。鼻緒になる輪っかは2本を擦(より)合わせてからいったん仮止めをし、足を入れて微調整してから縫い込むと良い感じの鼻緒の長さになった。まだ録画を見ながらだが、30分程で一足作れるようになった。自分で栽培した稲から装具を作れるようになった！



■35日め

足半の次はわら草履に挑戦。完成したわら草履を履いて会社へ出勤。

テンダーさんが「自然繊維で作った履物も使えないようでは地球環境を良くすることはできない」とおっしゃっていたことがずっと心に残っていました。今回、わら草履を履くという行動で、自分に向けられていた課題をクリアできたような達成感を感じています。新しいことをすると発見も多く、新鮮な一日でした。

そして、先ほどまでロープ講座の復習動画を視聴していて涙が出そうになりました。テンダーさんが「自然繊維から暮らしを構築すると、得るものも減るが失うものも減る。めざすのはここじゃないか」と喝破されているところが胸に響きました。得るものと失うものの差を小さくするという生き方。今、目に見える自然繊維から暮らしをどう構築するか。心が燃えてきますね。「今日編んでいた時間+自分で作った道具を身に着けて生活する時間」は、間違いなく「自分を豊かにしてくれている時間」でした。

わら草履で3日間通勤してみても：

JR京都駅とデパートの伊勢丹内を草履で歩いてみて、「この施設を草履で歩いた人間は俺が初めてかも!」と笑えた。人の目は気になるが、やってみればそれほどでもないとも思えた。草履の通気性の快適さと足裏の優しい温かさが快感。靴を履いていると足の蒸れを感じ、脱ぐと足の匂いがすることが気になるようになってきた。

■到達した地点

- もやい結び、巻き結び、ブルージック、トラッカーズヒッチを結べるようになり、タープやテントを張る選択肢が増えた。
- 自然繊維を使ってひもを作ることができるようになり、草を強い物に作り変えるという視点と技を習得できた。
- 足半を気負いなく作り始めて上げることができるようになり、草履作り(資料を見ながら)にまで発展できている。
- 恥ずかしさをこえて草履で通勤するようになって、少し環境にやさしい生活ができるようになり、周りの人に現代生活への問題提起をするきっかけづくりができている。



まっつんさんの実践

まっつんさんは、システム思考、交渉、NVC(Nonviolent Communication: 非暴力コミュニケーション)を実践。「自分と異なる意見に対しても、感情を切り分けて、落ち着いて議論できるようになる」ことをゴールに、家族や地域コミュニティの人たちとのコミュニケーションに取り組みました。途中、テンダーさんの助言で、「そこでの本当の目的は何か」を突きつめて考え、整理する視点を得たりしながら、実践を続けていました。ちょうど1ヵ月が終わる頃にお子さんの学校で面談があり、事前に「子どもが健やかに過ごす」ことを目的に据えたループ図を何パターンか書いたうえで臨みました。プライベートな内容が多いため、最終日のみご紹介します。

■30日め

NVCの「相手には相手の何か大切なことがあって、そのために行動している」を心において、power with¹⁾で話し合いができたときの満足感がたまらなかった。

昨日、学校統廃合のため、「新たな学校へ引きつぎたいこと」をテーマに面談があった。夏の面談ではpower underの状態で、先生が9割話した。価値観がかなり異なり、どこから説明してよいかわからず、理解し合えないかも、と諦めていた。衝突による面倒を避けるため、率直な意見は言わなかった。

結論から言うと、昨日は「そういう考え方もあるよね!」とお互い認識し合う。どちらかにググッと合わせるのではなく、というところに到達できた。「何をして過ごすかを本人が決めている!」周囲の期待より

も、自分がどうしたいかを大切にしてい!」と思っていることを先生に伝えた。先生からは「学校としては毎日来てほしいけど、それならそれでいいんじゃないかと私は思う。お父さん、お母さん、子どもではなく、それぞれが独立した個人みたい!」と言われた。そして、お互いに、早くこんな話し合いをすればよかったね、と。

■「なぜうまくいったのか?」の考察

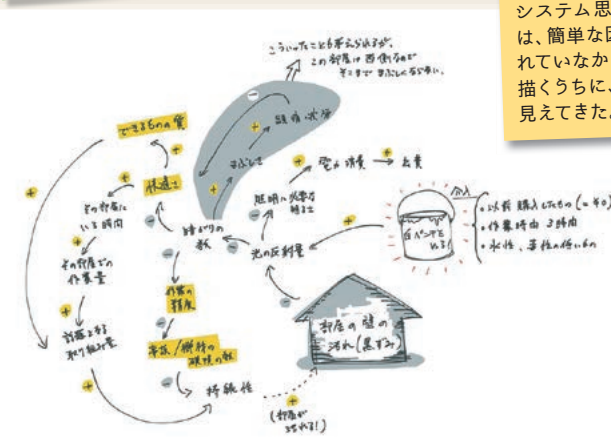
- ループ図を書くことで、自分とは異なる立場の視点から、物事の挙動を考えることができた。頭のなかで考えるだけだったら、狭い範囲の発想になっていた。
- 「相手が大切にしていること」や相手の「欲しい!」に思いをさせた。
- 権威に対して、モラルフレーム(道徳的権威)、一貫性の原理、ナラティブ(語り)を意識して使った。
- 「相手と同じ格好で交渉」を取り入れ、マスクをしてみた。
- 率直に、心を開き、「私はこう思っている」を伝え、相手の不備を指摘(攻撃)してワニ²⁾にブイッとされないようにした。
- 先生に多様性を受け止める余裕があった。
- 1クラス4名のため、1人に費やせる時間が長い。

それでも! 相手はよかれと思ってやっていることもあるので、「それはやめてくれ!」ということは言わないと、「自分以外に誰が言うのさ?」とも思った。例えば、自宅に迎えに来られることがどれだけプレッシャーで困るか、説明して初めて相手は気がついてた。

¹⁾ power withは、ともに力をもち、対等なやり取りをすること。power underは、自分を相手より下に置く(下手に出る)ことで相手を操縦しようとする。

²⁾ ここでいう「ワニ」とは「ワニの脳」すなわち脳幹のこと。見知らぬものに出会うと、まず脳幹が「闘争か、逃走か」を判断する。「ワニにブイッとされないように」とは、「相手の脳幹に拒絶されないように」という意味。

各グループで出たコメント



システム思考に取り組む前は、簡単な因果関係しか見取れていなかった。ループ図を描くうちに、システムが少し見えてきた。



テンダーさん提供

コヤッシーをこの1ヵ月で合計69回使った。水洗トイレを使ったのは3回だけ。便と灰を1ヵ月混ぜる経験をしたのはすごいこと。1ヵ月、トイレのことで頭がいっぱいだった。旅先でもトイレに目がいき、水洗トイレのインフラがないと人びとの暮らしが成り立たない様子を目の当たりにした。そのシステムをすごいと思うとともに、危うさを感じた。

ロープワークをやってみて、ひもを使うシーンが自分の暮らしにほとんどないことに気づいた。逆に、もっとロープワークを使う暮らしというのがあるんじゃないかと思った。



ほかのみなさんの日々の投稿を読んで、忙しい人たちがこれだけ実践しているというのがすごく刺激になった。自分の「忙しい」は言い訳だったな、と。

火起こしはわかりやすい。火がつくか、つかないか。自分の手のなかで火がぼっと出る。あのインパクトはすごい。最後にあのご褒美が待っていると思うと頑張れた。



参加者の皆さんがグループでそれぞれの実践について語り合ったあと、テンダーさんは、最終回と講座全体の企画の意図、皆さんの取り組みを通して考えたことについて改めて話しました。



破壊的ではない思想や暮らしを営む人が増えること

個人的には、この講座全体の大きな目的は、「破壊的でない思想や暮らしの人が増えること」でした。それはつまり、「自分の取った行動が答えであり、自分がやったことが希望だと思えるかどうか」。そこに賭けられなければ、「誰かがつくる未来」に便乗するしなくなってしまう。希望がもてる未来をつくるためには、自走できる技術を身に付ける必要があると考えていました。

実践の結果、「コミュニティができる

もう一つ考えていたのは、実践を積み重ねた結果、孤立するのではなく、「コミュニティ」ができてほしいということ。例えば、私は10年間オフグリッド¹をやってきたんですけど、やればやるほど孤立するんですよ。なぜかというところ、実践をずっと続けている人と実践していな

い人とは蓄積される情報の量に雲泥の差が生じるので、話も価値観も合わないようになってしまふから。だから最終回では、実践すればするほど話せる相手が増えるという結果的に「コミュニティ」が形成されているというデザインを試みました。皆さん今、分離式コンポストトイレで尿と便をどう扱っているかと、システム思考を実践する上での細かい悩みとかについて話し合っていましたよね。直接会ったことのない人同士で、おもしろいですよね。

*1 電気・水道・ガスを契約せずに自作のシステムでまかなうこと。

ことばの明瞭さ

皆さんの取り組みを見ていて、二つのパラメーター(変数、要素)があると悪いと思いました。批判するつもりは全くなくて、「もしお役に立つようでしたら受け取ってください」という気持ちでお話します。一つめのパラメーターは、ことば。ことばの明瞭さ、明瞭さです。まずは、自分の取り組みを明確に言えるか、言えないか。皆さん、実践の後半になるほどことばが明確になっていって、すごく興味深かった。多くの人が初期の段階では、自分が直面している問題が何かをとらえ

られなくて、「火起こしが難しい」のように曖昧な表現をします。一方で、例えば、「手で棒をこすり合わせながら下に下ろす運動が難しい」とか、「素材の選定が難しい」とか、明確なことばにできるほど、「自分が解決するテーマは何か」がわかってくるんですね。そのためには、システム思考で扱ったルーブ図が必要かもしれないし、哲学のように本質を明晰なことばでとらえていく学問が必要なのかもしれない。とにかく、ことばの不明瞭さから発生する問題と難易度がある。それはね、もう、回数を重ねるしかないんだと思います。

時間

もう一つのパラメーターは時間です。Discordでも多くの人が時間のなさについて書いていました。すごく難しい問題で、それぞれに忙しい事情があるのもよくわかります。でね、なんですよ。その時に何をとらえて何を試しているかが、すごく重要なんです。今回いろいろ考えて、何かを深めるには、時間の「質と密度と量」の三つが必要だという結論に至りました。質は、例えば、「気もそぞろ」みたいなこと。「あれもこれもや

「ephemera」と100回書くよりも、このほうが印象深くないですか？

刺激と、刺激の入り方の角度の工夫。そういうところまでデザインできるかも含めての「時間」なんだと思います。例えば、ロープワークを覚えるために考案した「ロープワーク都々逸²」の一つは、「ムーミン目玉に」というセリフから始まります。「ムーミンの目玉っ？」って、そこです。印象が強まる。そういう時間と脳の使い方があると思いました。

*2 第6回のウェブ報告記事をご覧ください。16ページのQRコードからアクセスできます。

パラメーターを一つ変える

何かを練習するとき、一つだけパラメーターを変えてみるという方法があります。研究と同じ手法です。同時に複数のパラメーターを変えない。一つだけパラメーターを変えて変化を確認します。そのときに、極大か極小を試して変化がどう起きるかを見ることをお勧めします。例えば、火起こしでなかなか火が起きない参加者さんに、「電動ドリルを使ってみてください」と伝えましたが、それは極大の例です。ドリルの先に火おこし棒をつけて、ドリルを回しながら棒を板にこすりつけてみる。それで火がつかなければ、人の手の力でもつかないということ。100ワットのドリルで回転させても(パラメーターを極大にしても)火が起きないということは、回転のやり方ではなくて、火起こし棒(素材)に何か問

題があるんじゃないかということになる。そういうふうには、パラメーターを極大か極小に変えて試すと、とても短い時間で実験と確認ができます。

「時間」とらえ方

渡辺由文さんという哲学者が書いた『時間と出来事』という本がありまして、渡辺さんいわく、「時間というのは概念であって、観察できるものではない」と。人は出来事をまずつくると言っているんです。例えば、今日皆さんがこの講座に参加するまでの間にいろんなことがあったと思うんですけど、そのなかで思い出せるのは「自分が出来事として認定したものだけ」という話なんです。「今朝、歩いていて34歩めの時に左手が前と後ろのどちらに振れていたか」というのは出来事ではないから覚えてない。記憶にないので、時間上はなかったという認識になる。そもそも、「人間は出来事の羅列を時間としてとらえているんじゃないのか」と書いてあるんです。難しいですね、哲学の話……。例えば、お金は概念です。貨幣は存在します。硬貨と紙幣はある。でも、それに価値があるとするのは人間の側の概念、つまり、頭のなかの出来事なんです。もし、極端なインフレや国家が無効化されるような事態が起きたら、貨幣はただの紙くず、金属くずになってしまふ。同じように、時間というのも概念でしかないんじゃないか。原初の「時間」というのは星の運行から導き出

されたものじゃなくて、出来事単位だったんじゃないか。

この話から今回の実践の時間のことを考えてみました。この1ヵ月、私は引越しが重なったこともあって、ものすごく忙しかったんですけど、最後までロープワークの実践ができたんです。それは、私がすごいからじゃなくて、「忙しい人たち」と時間のとらえ方が違うからじゃないのかなって思ったの。私にとって軽トラにたくさんの物を乗せてロープを結んで固定している時間は、「ロープワークをやってみる」時間ではなかったんです。「ロープワークのための時間」じゃなくて「ロープワークを生きている時間」なんです。よね。「生きていてロープを触っている時間」というか。それが、私の1ヵ月の実践テーマだった「技術と人格の統合(扱う技術と日々の生活・生き様が統合されているあり方)」ということだと思っただけです。技術と人格が統合されると、わざわざ時間という見つけろいをしてなくても自ずとそのシチュエーションを生きているということになるんだらうと考えるました。

頭のなかは自由だ!

NHKの「びじゅチューナー」という番組をご存知ですか? 井上涼さんというアーティストが、世界中の名画や名所をモチーフにアニメーションと歌を作った作品にしているんです。その一つに、ドラクロワの「民衆を導く自由の女神」をも

らなきゃ!」と焦るのではなくて、「学ぶ、盗むつもりでピジャットと取り組む」というのが質の話。密度というのは、「限られた時間内に観察と問いを繰り返す」というような取り組み方。例えば、「5分で漫然と10回繰り返す」よりも「5分で1回失敗して深く考える」ほうが密度は高い。あとは、物理的な量。かける時間の長さ。例えば、ロープワークは、1日5回結ぶくらいでは覚えられないと思う。

印象と刺激

「覚える」というのは、つまりは「印象」と「刺激」の話だと思います。自分の例で言うと、ある時、「刹那^{せつな}」ということばを英語話者に説明する必要があったんです。刹那、ご存知ですか? 仏教用語なんです。指をパチンと弾いた瞬間に65刹那とかあるんですね。時間の単位なんです。それで、刹那を英語でどう言うのかわからなくて困っていたら、相手の人が辞書で調べてくれて、「エフェメラル(ephemera)ー」って言ったんです。英和辞典を引いたら「花の舞散る間に」と書いてありました。古代劇に使われるような古いことば。「花の舞散る間に」が、刹那。エフェメラル。覚えちゃってください!?



チーフにした「民衆を温泉に導く自由の女神」という作品があります。そこでね、「頭のなかは自由だ!」って言っているんですよ。「明日への脚運びを決めるのは君なんだ」と。忙しくて頭の中は自由なんです。よね。これもね、今回すごく考えたことでした。忙しくてロープを結ぶことはできる。「時間のとらえ方」と「頭のなかは自由だ」ということが、既存のシステムから新しいシステムに移っていくときに必要なことのような気がするの。

人生の時間の密度

もう一つ思うのが「人生60年と
いるか、90年と
思っているか
でまるで違
う」ということ。
人間の寿命が延びた分、
人生の時間の密度は希薄になっ
たんじや
ないかと思
います。私
は今40歳
なんです
けど、「あと
20年で何
ができるか
」と考
えるのと「
まあ、あ
と50年あ
るしな」
と思っ
ているの
とは、時
間の過
ぎし方が
全然違
う。緊
迫度とか
密度とか
集中度が
変わ
ります。
もちろん
何歳まで
生きて
もい
んだけ
ど、何
年生き
る前提
で、「心
臓が脈
を打っ
ている
残り
の時間
」を配
分し
ていく
かが大
事なん
だろう
と思
いま
す。

なんでこんな話をしているかとい
うと、みなさんこの1カ月で、数種類のロー
プワークや、数千年伝承されてきた縄な
いや、草履の編み方をマスターしたり、
1970年代に起こった先端科学のシ
ステム思考とループ図を扱えるようになっ
たりしているんですよ。ただか1カ
月で。かたや、「5万円もする高いセミナー
に行ったけど、よくわかんなかった」み
たいな話もあります。結局は、時間をどう
使うのか。私の暫定的な結論は、「習
っちゃダメなんだ」ということ。自分の責任
で実践すれば深まる。けれど、習うと講
師の責任になってしまふ。だから、「自分
は残り時間でもどこまで行きたいか」「ど
こまで行くためにその技術がいるのか」
を考えるのが重要ななだと思います。

最後にもう一度グループに分かれ、
ここまでのテンダーさんの話を踏ま
えて「自分はこれから、いつまでに、
どこまで行きたいか」を話し合いま
した。皆さんの「表明」をいくつかご
紹介します。

- プラごみから自分が欲しいサイ
ズのブックカバーやクリアファイ
ルなどを作るワークショップを、
子ども向けに開きたい。
- 自分の家族が南海トラフ地震の
影響を受けるであろう地域に
住んでいる。大地震が起きる前
に、たとえ家族が大災害にあっ
て水洗トイレが使えない状況に
なっても、自分たちで衛生的な
トイレを用意して不自由なく使
えるようになっておきたい。
- 今の自分の生活は、「使う(消
費)」と「作る(生産)」のバラ
ンスが圧倒的に「使う」に偏って
いる。あと10年くらいで、両方のバ
ランスが取れるか、むしろ「作る」
の割合が大きくなるくらいのと
ころまでもっていききたい。
- この講座で扱ったような技術
を身に付けることが「自由な自
分」をつくらせていると思う。災
害にあったとしても、「何もで
きない」ではなく、「代わりに
これを使えばこんなことができ
る」と考えられる。ものの見方が

変わり、暮らし方そのものにパ
クアップシステムが備わってき
ている。それが、自由に生きたり、
自分の時間を豊かにすることに
つながっている。そういう自分の
実践の様子を発信していくこと
で、興味をもつ人たちのコミュニ
ティができてくるかもしれない。

グループ内で話すうちに、「今後
もお互いの実践の様子を知りたい」
「Discordに書いていたあの
方法について詳しく教えてほしい」
と、新たにSNSコミュニティを立
ち上げた人たちもいました。



最終回を終えて、いろいろな感想
が寄せられました。ご自身の学びの
あり方について、「自分が『教えてく
ださい』だけの人だったことに気づ
いた。学ぶとは『自分が興味をもっ
たことを、遊び、楽しみながら、観
察し、試行錯誤し、自分のものにし
ていくこと』だと考えるようになった」
と変化を感じた方。「全講座の録
画を販売してほしいくらいだが、ま
ずは自分で実践してきたことを深
めて他の人に向けて講座を開ける
くらいのレベルになるのが正しいよ
うな気がしている」と、自分が「伝
手」になることを視野に入れ始めた
方。また、講座の今後について、「自
分が学校で経験した学びと全然
違った。子どもの頃からこういう学
びが当たり前になったらどんな社
会になるだろうと思った」「もっと多
くの中高生が学べるように、単発で
もいいから講座を続けてほしい」等
のご意見もいただきました。「火
起こし」に取り組んだ学校の先生は、
生徒さんたちと「火起こしプロジェ
クト」を続けているそうです。「火
起こしの再発明」をしたい」と話
していました。講座終了後も実践者
たちの活動は続いています。



全講座を終えて

参加者インタビュー



前村春樹さん

高校2年生
プラスチック回ほかに参加

受け身でいることを望んでない

オンライン講座に参加する前、中学2年
生の夏休みに、鹿児島県のテンダーさん
のラボで3日間プレシヤス・プラスチックの研
修を受けました。学校の自由研究でプラ
スチックの再利用に取り組もうと思っ
たからです。ペットボトルキャップから
アクセサリを作ったりして1日めが終
わる頃、テンダーさんから、「もしイヤ
イヤやるってんなら、帰ってくだ
さい」と言われました。衝撃的な
一言でした。その時の僕の態度
はかなり受け身だったと思います。学
校の授業では、受け身で聞くだけ
で、自分から積極的に動くとい
うことをやってきていました。ラ
ボでも、授業を受けるような感
覚でいました。そして「ガツンと
言われ
て……」

一緒に来ていた母と、「続けるか。や
めて帰るか」といろいろ話しまし
た。その時に、「テンダーさんは、
僕が受け身でいることを望んで
ないんだ」と気づいたんです。「せ
っかくここまで来たんだし、最後
までやりきろう」と考えを立て
ておし、残りの2日間は

意識して積極的に取り組むよう
にしました。最終日は廃プラスチック
を溶かしてお皿を作ったんですが、
なかなか上手くいかず、何度も
トライしました。最後に納得の
いくお皿ができた時はすごく達成
感がありました。初めてのものづく
りの楽しさを味わいました。ラ
ボでの経験が踏まえてまとめた
自由研究のレポートは、学校で優
秀賞をもらいました。

ワークショップの講師になる

オンライン講座でも、プラスチックの
回ほかに参加しました。そして、
高校1年生の冬に、縁があって、
地域のイベントで「ペットボ
トルキャップからアクセサリを
作る」ワークショップをすることに
なりました。ラボでの研修と講
座で学んだことを参考にし
ながら、ワークショップを組
み立てました。人に教える
経験が初めてだったので、
参加者にどういふふう



前村晶子さん

春樹さん母
プラスチック回ほかに参加

投げ出さずに取り組んで得た自信

ラボでのテンダーさんのことは、「親
に言われて来てただけなんだ
たら帰れば」と言われていると
受けとめました。ああいう
ことをきちんと言ってくれる
人はいない。私にとっても
強烈な体験でした。最後ま
で投げ出さず、廃プラから
ものを作るこ



とに取り組んで、最後は春樹
なりにいいものができて
うれしかったと思います。
地域のワークショップでは、
事前にホールで開かれたイ
ベントで宣伝のための発表も
しました。当日は大盛況で、
お客さんが絶えませんでした。
「ペットボトルのキャップを
細かく砕く、大変だね」と
声をかけられることも多
かったのですが、その度に
春樹は、「これはプレシヤス・
プラスチックというプロ
ジェクトの活動なんです
けど、僕の師匠は、(プ
ロジェクトで公開されて
いる設計図をもとに)破
壊機も自作しています」と
説明していました。終了
間際には、「アクセサリに
緑色を入れたいからや
りなさい」というお客
さんがいて、私だっ
たら時間がなくて断
るところを、春樹は
「こうやったら緑
が入りますよ」と
対応していました。
いろいろな経験をして
自信につながったん
じゃないかな。来
年のワークショップも
声をかけてもら
ったので、地域で
プレシヤス・プラ
スチックが広が
っていくと思っ
ています。



*プラスチックを再利用することで環境への負荷を軽減しようという目的で始まった「オーナソールプロジェクト」は、世界的な取り組みです。テンダーさんは日本版の「Precious Plastic Japan」を運営しており、公開されている設計図をもとにプラスチックを破碎・射出成形するための機材一式を自作して使っています。



宮崎宏康さん
松隆中学校 Global Stream・美術科教員

【目の前の人がやってみせることの意味】

勤務校のグローバルコースで、身体や五感を使う活動を担当しており、その一つとして火起こしに取り組んでいます。グローバルコースでは英語と論理的思考・表現を重視し、探究やプロジェクト学習、プレゼン、ディベート、ICTなどを積極的に取り入れています。生徒たちは授業を通してさまざまな表現のスキルを獲得していきます。一方で、年齢的なこともあって、自分が「本当に思っている、伝えたいこと」を表現することを避けて、恥ずかしくたりします。さまざまなスキルの習得と同時に、表現したいという思いを動かす大もとのパッションとか感性とか感情を耕す経験が重要なんじゃないか。火起こしを含めて身体や五感を使う活動に取り組み始めたのには、教員側のそういう課題意識がありました。

ちょうどその頃、この講座のことを知り、火起こしの回に参加しました。この講座に出会ってなかったら、インターネット上の動画や記事からの情報をもとに火起こしの活動をしたと思いますが、テンダーさんから学んで取り組むのとは違うものになっていただろうと思います。例えば、テンダーさんは、「なぜ今そうなっているの？」「今何が足りないから火は起きないの？」とたくさん問いを投げかけます。「今火を起こすのに必要なものは何か」を探りながら火を起こす経験をして、ただ漫然と繰り返すの

ではなく、考えながらトライ&エラーをすることの大きさが強く意識に残りました。生徒と火起こしをするときも、集中力の加減を見ながらではありますが、問いを投げかけるように心がけています。

さらに、画面越しとはいえ、テンダーさんが火を起こすのを目の当たりにしたのはとても重要な経験でした。筋骨隆々の、圧倒的に自分とは違う体格の持ち主ではなく、すらっとしたテンダーさんが自分の目の前でリアルタイムで火を起こした。習得するまで何カ月も練習したとおっしゃっていましたが、それでも、目の前で火を起こすテンダーさんを見て、自分も練習すればできるんだと思えたのです。実際、私自身も練習を重ねて、60秒で火を起こせるようになりました。目の前にいる人がやってみせること、すかさず、リアリティのもつ力を強く認識しました。学校でも、まず私がみんなの前で火を起こします。そうすると、「うわー」と拍手喝采が起きて、「目の前にいる同じ人間が火を起こせるんだから自分にもできる。起こしたい」と思ってもらっているんじゃないかと思えます。

グローバルコースの生徒たちは、毎年火起こしに取り組んでいます。前回こ



しまうところがあります。でも、そうやって口で言っている人が、実はわかってなかったり、実際にはできなかったりもする。教員自身が体をくぐらせる体験をもつて試行錯誤することの重要性、そこをいつも問われている感じがしていました。体調が悪いときは講座に出たくなかったです(笑)。

6年生向けの「家出講座」

自分が講座を受けるだけでなく、2023年1月には、当時の勤務校の桐朋小学校にテンダーさんをお呼びして、6年生向けに「ロープワーク」の授業をやっていただきました。その名も「家出講座」。草を編(な)って縄を作り、校庭の木にロープを結んでタープ(ブルシート)を張り、その中に入って過ごしてみる。自分の手で草からロープを作り、ロープワークを身に付けて屋根や壁を作ることができれば、風を防ぎ、暖かい空間をつくって身体を守ることができ(「家出もできる!」)ということを感じていく授業でした。

子どもたちは、「自分の役に立つもの、必要なものを、自分で作る」という発見に喜びを感じているようでした。「家族でキャンプをするときは専用の道具を使ってたけど、意外にも、ペグは木の棒で、ひもは自分たちが編った縄で、タープはブルシートでできた。うれしかった」という子もいました。専用の道具を買わなくても、身近なものを



桐朋小学校提供

まくいかなかったから今回はこうしようと、経験を踏まえて工夫している様子が見受けられます。最初は火を怖がる子も多いのですが、だんだん慣れてきます。この辺まで近づいても大丈夫と、体験からつかんできているようです。今の生徒たちは、授業もプライベートも、多くの時間をスマホやタブレットのディスプレイを見て過ごしています。私の担当する美術でもタブレットで絵を描くようになりました。けれど、世界にふれるのがディスプレイを通してばかりだと、その世界は電気が止まったら全部ストップしてしまいます。ディスプレイを介さない世界も大事にしておきたい。これからは、生徒と実体験を通してトライ&エラーを積み重ねていきたいと思います。



島田晶子さん

小学校教員 システム思考回ほかに参加

3・11を経て授業の目的が変わった

東日本大震災を経験して、自分たちが生きている社会が成り立っている仕組み、暮らしを頼っているエネルギーのことについて、あまりにも無自覚で、間うことすらせずに日々を生きているというのを思い知らされました。自分自身の生活はもちろんですが、授業でもこの課題を正面からとらえていかなないとだめなんだと痛感したんで

使って自分たちの役に立つものを自分で作り出せる。そこに気づいていたのはすごいと思いました。

当日は風がとて強くて、ブルシートを張るのもなかなかうまくいきませんでした。けれど、ブルシートを張るだけでこんなに暖かいんだとか、風をしのぐってこんなに大事なんだとか、屋根の角度が大事なんだとか。自分たちが草を編って作ったロープがどれだけ実用性のあるものだったのかとか。子どもたちの感想を読み返すと、そういうことを身をもって経験したことが伝わってきます。

【問いをもつて生きる】を学ぶ

テンダーさんに学校での授業をお願いする意味の一つは、もの見方が変わるといふことだと思えます。「世界との向き合い方」が自分や周りの大人とまったく違う人に出会うことで、自分のもの見方が揺さぶられて、世界の見方が変わっていく。テンダーさんは、衣食住のあり方、エネルギーのことなど、「これでいいの?」「これでこの先やっていけるの?」と問いかけます。私たちも「今あるものを疑う」という学びを重視して、「現代社会の課題を知り、その背景を探る」取り組みを行ってきました。ただ、その先の実践をどうするのかというところはなかなか難しいのが現状です。テンダーさんは現代社会の課題を背負いながら、解決に向かって具体的な実践を続けている。「問いをもつて、一つひとつを生きている」と言ったらいいんでしょうか。そういうあり方にふれると、学びはとておもしろくなるし、深くなる。これからの生き様を考えることにもつながると思えます。

ただ、そういう学びが成立するには、前後の学びがしっかり組織できている必要があるとも思えます。子どもはびっくりするほどいろんなことを覚えていくので、一度の出会いでその後の人生が変わることもあり

す。そこから、いろんな教科を通じて、子どもたちとエネルギーについて体験的に学び、自分たちの生活を見直し、自然のエネルギーをもつていかす方法を考えるような授業に組み替えていきました。

ちょうどその頃、たまたまテレビで「テンダーの思い」というドキュメンタリー番組を見たんです。テレビに映し出されるテンダーさんは、山の中で家族とオフグリッド生活をしていました。世の中のいろんな矛盾に目を背けて隠遁生活をしているんじゃないかと、「自分たちがこんなにダメにした世界でどう生きていけばいいのか」を探った結果、そこに生きているのが伝わってきました。しかも、悲壮感もなく楽しそう! こんな人がいるのかとすごくうれしくて、「いつか直に会って話を聞きたい」と思いました。

そんな経緯があって、2019年秋にTJFが東京で開催したテンダーさんのワークショップに参加しました。その後、一緒に参加した先生たちと、学校の研修プログラムでテンダーさんのラボを訪ねる計画も立てていたのですが、コロナで頓挫してしまっ。忸怩(じくじ)たる思いをしてきたときに始まったのが、このオンライン講座でした。

自分で道具を作り替える

オンライン講座には数回参加しました。すごく感動したのは、アルミ缶を使ったコンロ作りで、自分でハサミを加工したことです。アルミ缶の底を丸く切り抜く作業があるのですが、



桐朋小学校提供

ます。けれど、前後の学びと連動されていないと、「いい体験できたな」だけで終わってしまうことが多い。その自身の生活やそれまでの体験と結び付けたり、発展的な学びにつなげていくことで、もの見方が変わっていくのだと思います。責任をもつて系統立てた学びを組織する教員がそこにいる必要があると考えています。できることなら、テンダーさんが何か月かごとに来てくれるのが理想ですけどね! (TJF注)

*1 2015年鹿児島テレビ製作、第24回FNSドキュメンタリー大賞優秀賞受賞作品

*2 2019年11月実施「教育しか残せない時代」

*3 実際の家出講座では、タープを張るのに十分な長さの縄を編う時間がなかったため市販のものを

使用

(TJF注)
2024年2月に、桐朋小学校でのテンダーさんの講座第2弾として「火起こし」の授業が実現しました(TJFも講師派遣の部分でお手伝いさせていただきました)。その後、授業に参加した子どもたち、保護者、先生方の有志で、鹿児島県のテンダーさんのラボで合宿をする自主企画も進んでいます。



バーナーで熱して刃先を曲げ、丸く切り抜くための道具に作り替えるという経験をしたんです。目的に合った道具を自分で作るという発想は、それまでの自分にあるませんでした。衣食住に必要なものをなるべく自分で作り出そうとはしていたものの、道具は、専門家が作った物を買って使うのが当たり前になっていました。この経験は、私にとっては大きな転換点で、「やっぱり自分が実践しないとだめだな。知っているつもりになって授業をするのは、子どもたちに責任を押しつけて、自分では引き受けてないってことじゃないか」と考えるようになりました。

【問題から遠い】人ほど美しく怒る

講座を通して私がいちばん感じ入ったのは、テンダーさんは、「これはおかしいよね。問題だよな」と思ったことに体ごと入って行って、そして実際につくり変えようとしているということでした。しかも、ものすごく泥臭く。その探究心の半端なさ。そこまでしないと、リアリティにはたどり着かないのかもしれないと思いました。2022年夏にテンダーさんのラボでの研修が実現したときのことなんですが、テンダーさんが「その問題から遠い人ほど、美しく怒る」ということをおっしゃったんです。自分は問題の当事者にはならず、離れたところから、泥をかぶらずに「問題だ、問題だ」と言う、と。講座に出ていると、まさにそのことが自分に突きつけられているような気がしました。教員って、気をくげないと、まるで自分がいちゃばんわかってるかのよう、に、体裁のいいことを「こうあるべき」と子どもたちに教えて

全講座リスト



各講座の詳細はこちらよりご覧ください。▶▶

01



アルミ缶を使い倒そう

私たちの生活に身近なアルミ缶は、軽くて柔らかく、さびにくい上に、ある程度の強度を備えた優れた金属素材です。アルミ缶ごみから調理用のアルコールストーブを作りながら、アルミの特徴や扱い方を学びました。また、直線用のハサミをバーナーで熱して、アルミ缶の底を丸く切り抜くためのハサミに作り替えました。

02



棒と板だけで火を起こそう

もみぎり式火起こしに挑戦し、火が起こる仕組みや体の使い方などを探究しました。「今何が足りないから火が起きないのか？」テンダーさんが矢継ぎ早に繰り出す問いを手がかりに、学校の授業で習った燃焼の三要素、分子、摩擦、熱力学などの知識を、目の前の事象と結び付いた経験知として学びなおしました。

03



3D設計と3Dプリントを覚えて、必要なものを作ろう

3D設計と3Dプリントの技術を身に付けると、自分や周囲の人が必要なものを自分で設計し、必要な数だけ作ることができます。オープンソースのデータをダウンロードして利用すれば、石油を燃料とする輸送も発生しません。講座では、3D設計の基本を学ぶために、ソフトを使ってコップを設計しました。

04



雨水タンクを作って、水を自給自足しよう

地球上の限られた資源である水を、雨水から得る雨水利用。日本のように雨の多い地域では、屋根に降ってきた雨を溜めるだけで、暮らしに必要な水の大半を自給できます。講座では、雨や水の安全性について学び、少ない初期投資で始められる雨水タンク作りに取り組みました。材料は日本の水道用途の基準を満たすものを使用しました。

05



システム思考を身につけて「しょうがない」を乗り越えろ！

物事のつながりを理解し、「最小の関わり方で最大の効果を得るにはどうしたらいいか」を考える技法「システム思考」を学びました。13種類のワークを体験しながら物事の連鎖とシステムの挙動、社会の暗黙の前提などへの気づきを深めたほか、物事の連鎖を可視化して解決点を探るループ図作成にも挑戦しました。

06



その辺の草からロープを作ろう。ロープができれば暮らしが始まる

ロープワークの習得を通して結びが摩擦をコントロールする技術であることを考察したほか、ロープが重要な役割を果たす滑車の仕組みを学びました。また、チガヤ、わらなどの身近な繊維植物から縄を編み、縄から履物を作る経験を通して、長さの有限な草を編むことで無限の長さや面、立体を生み出せることを学びました。

秋の特別編



「正しさ」を越えて

CNVC*認定トレーナーの安納献さんと鈴木重子さんを特別講師に迎え、自他を理解し、自他の振る舞いの暴力性を見つめ、心からのつながりを得るための技法である「NVC（Nonviolent Communication：非暴力コミュニケーション）」を、グループワークなどを通して学びました。

07



プラごみから必要なものを作る

プラスチックの種類や特性を知り、ペットボトルキャップからアクセサリーを、レジ袋からカードケースを作ったりしながら、プラごみから自分に必要なものを作る技術を学びました。さらに、リサイクルのあり方やプラスチックの添加剤が引き起こす毒性の問題、プラスチックの時代にどう生きていくのかについても考察をめぐらせました。

08



キッチンで鋳造を始めよう！

鋳造は人類が6000年ものあいだ継承してきた古い技術で、今でも大型タンカーの巨大スクリューなどは鋳造で作られています。鋳造を身に付けられれば、アルミごみから金型を作ることもでき、金型を作れば物の量産が可能になります。講座では、砂で作った型に溶かした錫（すず）を流し込んでお猪口（ちょこ）を作りました。

09



鉄工を身につけて強力なストーブを作ろう

今の文明社会の根底を鉄が支えているにもかかわらず、多くの方は鉄の加工方法を知りません。講座では、ペール缶を使った調理用の「火熾（ひおき）ストーブ」を作り、鉄の特性や扱い方を学びました。また、輻射（ふくしゃ）などの熱の伝わり方を学び、その仕組みを利用するために火熾ストーブがどのように設計されているかを考察しました。

10



きみのためのエネルギー。実用パラボラソーラークッカーを作って太陽熱で調理する

地球上のすべての生物に無償で降り注ぐ太陽の光を1か所に集めて調理の熱源として利用するソーラークッカーを作りました。市販の実用ソーラークッカーは高額ですが、講座ではホームセンターでそろった安価な材料を使用。太陽光の焦点を調理器具に合わせるためのパラボラ製作では中学の数学で習った $y=ax^2$ の2次曲線を使用しました。

11



交渉を学び、こころざしを護る

異なる価値観をもつ人と出会ったときに、正しさや権威をもちだすのではなく、「私と全くもって対等なあなた」と受けとめて「お互いの視野を広げる」ために行う交渉とはどういうものかを、脳の仕組みや非暴力の観点から考察しました。また、自分たちの脳の振る舞いを体感するためのさまざまなワークに取り組みました。

12



生き物の輪に戻るためにドライトイレを作ろう

安全で衛生的なトイレがないことで起きる問題、高度な下水設備でも処理しきれない物質が離れた地域で問題を引き起こす構造などを考察したあと、ドライトイレ「コヤッシー」を製作しました。コヤッシーは便と尿を分離し、無害で植物の栄養分を多く含む尿を再利用するための装置です。便は灰と日照で滅菌して土に戻します。

13



その辺のもので生きる 最終回

参加者が、これまで講座で扱った技術のなかから自分が選んだものを1ヵ月実践し、実践中の発見や挑戦、成長、葛藤、課題などを日々SNSに投稿しました。1ヵ月後にオンライン講座の場が集まって実践を通して考えたことなどを共有。テンダーさんは、最終回と講座全体の企画意図について説明しました。

2年間を振り返る

担当者としてこの講座を始める前に次の二つの課題が念頭にありました。一つは、3ページで理事長が言及しているように、多様化が急速に進み社会の課題が複雑化する状況を見据えて、TJFがめざしてきた「多様な背景をもつ人材が、互いを尊重し合いながら新たな価値をつくっていく社会」をどうやって具現化していくのか。もう一つは、学校の外側にいる財団だからこそできることは何なのか。ここには今後、少子高齢化や気候変動、国際情勢の変化などにより、社会構造も自然環境も大きく変わっていくなかで、何をすれば次の世代にとって生きやすい社会を残せるのかという問いもありました。

そんな折、テンダーさんのことを知りました。テンダーさんは、さまざまな課題を抱える地球環境や社会において、まさに次の世代に何を残せるのかという視点から、個人と社会をとりまく問題の構造を明らかにし、新たな仕組みと技術を創造することによって解決しようとして日々研究、実践していました¹⁾。現代社会の課題を直視しながらも、異なる主義や信条をもつ人の考えを「ことばによる

教え」(ソフトウェア)で変えようとはしない。代わりに、この講座で扱ってきた火熾(き)ストープやドライトイレ「コヤッシー」のように、具体的な物(ハードウェア)を作り出すことで別の仕組みを動かそうとする。しかもその方法は、大掛かりなプロジェクトを立ち上げたり、特別な設備や材料をそろえたり、多くの費用をかけたとしても、ひとりで始められるものばかりです。TJFがめざす「多様な背景をもつ人材が価値の対立を越えて互いを尊重し合う」社会をつくっていくための次の手がかりを、テンダーさんの知見から得られるのではないかと。そう考えて、この講座の企画を始めました。

構造をとらえリアリティを見ていく

2年間を振り返るとこの講座は、テンダーさんの技術を受け取りながら「テンダーさんがその技術にたどり着くまでのプロセスを追体験する場」でした。第12回「生き物の輪に戻るためにドライトイレを作る」を例に、参加者の皆さんがテンダーさんに道案内されながら体験した、構造を解き明かし解決案を導き出すプロセスの一部をご紹介します。



テンダーさん設計のドライトイレ「コヤッシー」。ポリプロピレンシートを切り抜き、手で折って組み立てる。

まず、貧困などの理由によって「安全で衛生的なトイレ」と「公衆衛生の知識」がない状況が、多くの子どもたちの死につながることを見ていきます。そして、トイレが「大腸菌や寄生虫などの病害を封じ込めて管理する」機能をもつことを知ります。次に現代的な水洗トイレと下水設備に視点を移します。すると、下水というシステムが、都市のように人が集まって住む場所ではその集団に対してとても衛生的な働きをする一方で、高度な設備をもつても一定量残ってしまう窒素などの物質が海や川や他の生き物に影響を及ぼし、離れた場所の人たちに不利益を生むことがわかってきます。さらに視点を改めて、今度は人の糞尿の毒性と栄養分に着目します。すると、便は大腸菌などの有害物を含むけれど、尿はほとんど無害で、むしろ植物の三大栄養素の窒素・リン酸・カリウムを豊富に含むことを知ります。こうして複数の角度から読み解いていくと、この構造がもつ次のような要素が明らかになりました。「トイレがないことは子どもたちの死につながる。一方で、高度な下水設備でも残ってしまう物質は他の地域の人や生物に害や不利益をもたらす。しかし、その残留物質は植物の栄養にもなり得る」

ここまでをふまえて、この問題の解決案の一つとしてドライトイレ「コヤッシー」が提示されます。コヤッシーは「人体からの窒素・リン酸・カリウム回収装置」で、尿と便を分離し、尿は植物の肥料として利用、便は灰や日照を使って滅菌した後土に戻します。また、資金や資源、設備を持たない個人が取り組めるように、2ドル以下の材料で、かつ折り紙を折る要領で容易に作れるように設計されています。さらに、薄くて平らなポリプロピレンシートを主な材料にすることで、大量輸送ができてコストが抑えられ、災害時に備えた備蓄も可能になり、廃棄時に燃やしても有害物質がほとんど発生しません。

このように、この講座はドライトイレなどの物を作る技術を身に付けながら、その物が生まれた背景にある問題の構成要素を解き明かしていく方法と、物自体が新しい仕組みを動かすための設計方法も一緒に受け取っていく構造になっていました。さらに、作った物を使っていけば、今度は自分が新しい仕組みを動かす側に移行していくこととなります。

自立した、対等な個であるために

ハードウェアによって構造を変える考え方は、講座全体の設計にも採用されていました。例えば、この講座では、その場にいる全員が自立した対等な個であることを大事にしていました²⁾。そのため、テンダーさんとTJFは、参加者が「講師や運営側の指示に従う」のではなく、「自分がどのようにするかは自分が決める」ようにしたいと考えました。もし「作業のスピードが自分には速すぎる」と思ったら、「ここからは録画を利用して自分のペースで学ぶ。今は見るだけにする」などで自分で判断してほしい。そこでテンダーさんが考案したのが「こちらはよろしくやっています」ボードです。このボードを画面の前に掲げれば、全員の前で断りを入れるという精神的負担を負うことなく、自分の望む過ごし方ができます。他の人たちは、その人に何か問題が起きていないわけではないとわかります。ボード

を掲げることが、「自分のニーズの実現」と「全体の進行や周りの学びを邪魔しない配慮」を両立させていました。6ページの「自分で自分の実践に責任を負う」話に通じる、「自分の学びを誰かに委託せずに、それぞれが担う」場の設計の一つでもあります。

人生に役立つ智慧として学び直す

講座では毎回、「試す―観察する―思考する(仮説を立てる)」という探究のプロセスが繰り返されました。その過程では学校で習った知識が人生に役立つ智慧として学びなおされることもしばしばでした。例えば火起こしでは、燃焼の三要素(酸素と温度と燃えるもの)や摩擦、身体の重心のかけ方などの条件がそろわないと火は起きません。なかなか火が起きない状況を前に、テンダーさんが「何が足りないから火は起きないの?」「なぜそれが足りないってわかるの?」と問いかけます。その問いに応えようと観察の解像度を高め、見つけた手がかりに学校で習った知識を掛け合わせながら仮説を立て、また試す。その繰り返しはまさに、知識が身体感覚を伴って目の前の現象と結び付き、自分の人生を助ける智慧へと変換されていくプロセスでした。「何が足りないのか?」「なぜなのか?」を探究する時間は、自分の都合とは関係なく存在している「世界のリアリティ」に相対する時間でもありました。

講座終了後は、参加者インタビュー

自分の手で選択肢をつくり出す

改めて講座全体を見渡すと、テンダーさんからおすそわけされたものは、さまざまな問題に出会っても、他者から奪うことなく、自分の手で選択肢をつくり出して生きていくための考え方と具体的な方法でした。社会構造も地球環境も大きく変動するなかで、次の世代は今よりも多くの困難に直面するかもしれません。そのときに、テンダーさんのあり方は、「自分には何もできない」「しょうがない」と目を閉ざしたり諦めたりせず、希望をもって生きていく一つの方法を示してくれていると思います。

運営側としては、参加者が「技術を身に付ける当事者」として、「テンダーさんが本気で問題を解決しようと試行錯誤した道筋」をたどったところに、この講座の核心部分があったと考えています。「本気で解決」しようとする、自分が慣れ親しんでいるものだけを見ていても始まりません。コヤッシーの例のように、問題を構成している要素にはどんなものがあるのか、それぞれの要素がどのように作用し合っているのかを見ていくことにな

ります。リアリティをつぶさに見て解決点を見いだし、他人の思想信条を変えるのではなく、仕組みを変えることで問題を解決しようとする。そのあり方はまさに、多様な人たちが互いの違いや対立を越えてともに生きていくときに必要とされるものです。加えて、この「構造を解き明かし仕組みを変える方法を見出すプロセス」は探究の道筋そのものでもあります。これらを当事者として濃密に体験するからこそ、今後の人生に役立つものとして強く残っていく。そこにこの講座の醍醐味の一つがありました。

冒頭に挙げた二つの課題に立ち戻ると、「自分たちをとりまく問題を構成する要素(リアリティ)をつぶさに見ていく方法」と「問題を問題にならないように変えていく方法」を、先行する実践者とともに当事者として体験する場をつくっていくこと。それが、今後社会や自然環境が変動しても、多様な背景をもつ人たちが、対等な立場で新たな価値をつくり出して生きていくために、TJFが学校の外側においてできることの一つだと考えています。この2年間の蓄積をもとに、今後は地域や学校でワークショップを行っていきます。

(事業担当 室中直美)

¹⁾テンダーさんのこのような取り組み方を支える考え方にインスピレーションがあります。詳細は、第5回のウチノ報告記事(参考)をご覧ください。
²⁾対等性という観点からこの講座を支えていた考え方に、NVCがあります。詳細は、「秋の特別編」のウチノ報告記事(参考)をご覧ください。
³⁾各講座の報告記事には16ページのQRコードからアクセスできます。

PCAMP地域版を広島からスタート

2020年度から2年にわたり、新型コロナウイルス感染症拡大に伴うさまざまな行動規制により、多言語・多文化交流「パフォーマンス合宿」(PCAMP)をオンラインで実施してきました。2022年に入り行動規制が徐々に緩和されてきたことで、対面での再開を決め、2022年8月にPCAMPを広島県安芸高田市で実施しました(ひろしまPCAMP2022)。広島県内の高校生を対象とし、共催機関のNPO法人安芸高田市国際交流協会(AICA)をはじめ、呉市、東広島市、福山市などの団体から協力を得て、地域のネットワークをいかした初めての地域版PCAMPとなりました。

広島駅からJR芸備線で1時間半ほどの県北に位置する安芸高田市に、地

元はもちろん、東広島、呉、遠くは瀬戸内の島からフェリーと電車を乗り継いで来た参加者も含め、28名が集まりました。参加者のバックグラウンドは、中国、日本、ネパール、バングラデシュ、フィリピン、ブラジルなどさまざまでした。

*PCAMPでは、高校進学準備をしている方も含めて15〜19歳の高校生年代を対象としています。

PCAMPで大事にしていること

PCAMPは2018年のプログラム開始時から、「多文化×芸術」をコンセプトとしています。さまざまな言語や文化の違いを乗り越えるには芸術が有効であり、さらに違いや多様であることを豊かさ、創造性の源ととらえる芸術は多文化共生のマインドを育む栄養になると考えるからです。

演劇やダンスのアクティビティを取り入れ、パフォーマンス作品をつくり、最終日に発表することをゴールにすることで、その過程で参加者同士が関わり合い、話し合い、助け合いながら、自然に交流が生まれるようにしました。PCAMPで大事にしているのは、

「安心・安全の場」にすること。こうした場があって初めて、目標としている「参加者一人ひとりがもつ言語、文化、経験、個性を尊重し合い、それらありのままに自由に、積極的に表現すること」が達成できます。ファシリテーターは、PCAMPが安心・安全の場であることを感じ取ってもらうために、会場の掲示物、声かけ、プレワーク、ウォーミングアップのアクティビティ選びや順番などに細心の注意を払っていきました。また、日本語が第一言語ではない参加者がいるなか、できるだけやさしい日本語を使い、アクティビティをするときは必ずサンプルを見せるようにし、そして参加者同士で言語をサポートし合えるような雰囲気とチーム構成を心がけました。さらに、ファシリテーターが期間中に買ったの

は、これがいい、こうすべきといった「指導」をするのではなく、参加者のアイデアを引き出すような問いかけ、じっと待つ姿勢です。実際に「大丈夫大丈夫!」「いいねえ!!」というファシリテーターの声かけが、安心感を与えてくれた「初日からみんなと話ができた」「最初から楽しかった」と参加者も語っていました。

これらに加え、地域版PCAMPでは地域の人材と資源の活用や地域の文化にふれることも大切にしています。ひろしまPCAMP2022では、ファシリテーターチームに地元のアーティスト2人に加わってもらったり、安芸高田の伝承芸能である神楽を参加者みんなで鑑賞したり、発表会の舞台に地元の社会福祉法人ひとは福祉会「就労



広島県



©キクイヒロシ

なぜ広島?

第1回、第2回のPCAMPは全国の高校生年代の生徒を対象に東京で実施しましたが、東京から遠方の高校生は参加しにくくなります。そこで、いろいろな地域の高校生が参加しやすいように、各地で実施したいと考えていました。そんなとき、第2回PCAMPにフィリピンにルーツをもつ広島県安芸高田市からの参加者がいました。この参加者はNPO法人安芸高田市国際交流協会(AICA)が運営する日本語教室の生徒であり、指導していた日本語教師がPCAMPへ引率し、発表会も見てくれました。AICAの代表理事である明木一悦氏は、この2人から感想を聞き、「これはいいプログラムだ!ぜひ安芸高田市でもやりたい」と直感が働いたといいます。その後、TJFと協議を行い、2020年夏に全国版PCAMPを安芸高田市で実施するという計画ができていました。しかし、コロナ禍で中止に。

2022年に対面での実施再開を決めたときに、真っ先に明木氏に相談。そして、全国版ではなく、広島県の高校生年代を対象とするPCAMPを地元の機関と一緒に実施することになりました。それは、海外につながる青少年が多く生活し学んでいる地域で多文化共生に取り組んでいる団体と一緒にPCAMPを実施すれば、各地域の多文化共生のニーズや実情に即したものになり、地元根づいたものになっていくと考えたからです。



地域で支えてくれた方たちのインタビュー映像はこちらからご覧いただけます。



サンプルを見せるファシリテーター。常にエンジン全開。



舞台を彩るさをり織

©キクイヒロシ

4日間のおもな活動

1日め



シアターゲーム



【お楽しみ会】
花火

2日め



チームダンス



「I am from」創作



【お楽しみ会】
神楽鑑賞

3日め



作品の仕上げ



リハーサル

4日め

発表会



写真はすべてのキクイヒロシ

【事業データ】

多言語・多文化交流「パフォーマンス合宿 in 広島」
(ひろしまPCAMP2022)
期間：2022年8月4日(木)～7日(日)
場所：広島県安芸高田市
主催：公益財団法人国際文化フォーラム(TJF)
共催：NPO法人安芸高田市国際交流協会(AICA)
後援：安芸高田市、安芸高田市教育委員会、広島県教育委員会
協力：こどものひろばヤッチャル(東広島市)、ひまわり21(呉市)、びんご日本語多言語サポートセンター びんど(福山市)、ワールド・キッズ・ネットワーク(呉市)、公益財団法人東広島市教育文化振興事業団
ファシリテーター：柏木俊彦(演出家・舞台俳優)、田畑真希(振付家・ダンサー)、森永明日夏(舞台俳優・ティーチングアーティスト)
サブファシリテーター：江島慶俊(俳優)、坂田光平(俳優・舞台美術)
参加者：中高生28名
参加費：無料

合った様子がよくわかった。仲良くなるのに、時間や性別は関係ないんだなと思った。「自分を表現することが難しい人や表現の難しい環境があるなか、この活動は機会を与えてくれるものだと感じた」「初めての出会いという環境から一つのことを創造する、人生でそんなに経験できることではないかもしれない。これに参加できた。そこそが成果であり経験。今現在、リアルなコ

ミュニケーションが少なくなっているなか、素晴らしい経験ができたと感じた。「多文化共生、今まさに求められることを地域で子どもたちに体験させる、素敵なプログラムだと思った」などの感想が上がりました。



4日間の詳細はPCAMPウェブサイトよりご覧いただけます。活動の様子を撮影した動画、発表会の動画もあります。

「I am from」キーワード

- ①小さい頃、特別な誰かがつくってくれた大好きな食べもの
- ②小さい頃好きだった遊び
- ③小さい頃好きだったおやつ、お菓子
- ④好きな歌詞(歌手、曲のタイトル)
- ⑤小さい頃住んでいた街
- ⑥小さい頃いつも家で言われていたことば
- ⑦勇気をもらったことば
- ⑧尊敬する家族または親しい人
- ⑨2022年

初日に全身を動かして体と心をほぐし、参加者の距離が近づいた2日めに「I am from」の活動を行いました。「みんなはいるんなものでできているよね。血とか肉とか骨以外にも、勇気をもたらしたことばとか、小さいときの好きなお菓子とか……。これらを全部含めて「I am from」というファシリテーターの説明のあと、提示されたキーワード九つに一人ひとりが向き合い、

自分を振り返る

これまでにオンラインプログラムでも取り入れていた「I am from」を作品づくりの中心に据えました。「I am from」はアメリカで行われている多文化演劇教育プログラムで、自分のこれまでをいくつかのキーワードに沿って振り返り、自分を形成するものやアイデンティティを見つめるものです(25ページ参照)。

そして、一人ひとりの「I am from」をチームでシェアし、一人二つ程度のキーワードを組み合わせてチームでシナリオをつくり、演技や動きを付けていきます。さらに、初日に体験した身体表現を使って各チームのダンスをつくったり、有志でスペシャルダンスをつくったりしました。これらを組み合わせたものと、全員で踊るダンスやチーム作品間のブリッジ(つなぐ表現やフォーメーション)で発表作品を構成しました。

いよいよ発表会

最終日の8月7日、発表会には参加者の家族、演劇教育に携わっている方、テレビや新聞を見た方など80名を超える人たちが来てくれました。思い出さばいっばいの大好きな食べもの、尊敬する人、勇気をもらったことば、大好きな歌……。今の自分をつくっているさまざまなものを舞台上で表現

「高校生の思いを受け取った」

パフォーマンズの発表後、ファシリテーターの進行で、参加者一人ひとりが作品とプログラム期間を振り返りました。最初は緊張し不安だったが、いろいろなアクティビティを通して仲良くなったこと、濃い4日間だったこと、良い作品ができてよかったことなどが感想として多く出ました。

見学者の方々からは、「率直な高校生の意見や思いが伝わってきた」「緊張のなかでも自己表現をし、みんなとつながりを求めて楽しんでいたのでないかと推測できた」「みんなが協力し

していきます。「I am from」の締めくくりは、「2022年への思い」。「ぼくの2022年、社会人になっていくことへの不安」「私の2022年、辛抱」「人間関係の不安」「進路の悩み」など、いま抱えている不安が並び、舞台上にうずくまりますが、次に全員が前を向き、希望を託した「2022年への思い」を一人ひとり口にしました。

「未来への希望」とびきりの笑顔「新しい出会い」「自由」「希望」「勇気」「泥くさい努力」「チャレンジ」「新しい扉」「挑戦」「輝き」「何事にも全力で」「自分を信じる」「幸せ」「健康」……。そして最後は全員が一カ所に集まって「We are from!」。力強い声が会場に響き、発表会の幕を閉じました。

コロナ対策

5月に募集を開始すると、6月末の締め切りを前に定員を超えました。そこでファシリテーターを増員し、応募者35名を全員受け入れることにしました。ところが、8月の本番が近づくにつれて、感染が拡大し、本人や家族の感染に対する不安から辞退者が続出。また発熱による不参加もあり、結局28名の参加となりました。

コロナ対策として、参加者、運営者、舞台技術関係者などを含む全員に対して、本番直前のPCR検査と本番開始3日前からの検温、期間中の朝夜の検温、会場入り口での検温と手・靴底消毒、日中・夜間の換気、マスクの常時着用、食事での黙食などを行いました。

これらの対策と並行して、猛暑対策として、こまめな水分補給、あめなどで塩分・糖分補給も行いました。これらの対策が功

奏し、誰も体調不良を訴えることなく本番を終りました。

ただ終了翌日に、ファシリテーターの1人にコロナ陽性が確認されました。参加者の保護者一人ひとりに連絡を取り、PCR検査もしくは抗原検査を受けてもらうようお願いしました。謝罪する担当者に対して、保護者の方からは叱責どころか、参加させてもらったことへの感謝や励ましのことばを多くいただきました。

自分のアイデンティティを見つめる「I am from」

ひろしまPCAMP2022のメインアクティビティとして取り入れたプログラム「I am from」は、アメリカの多文化演劇教育の現場で実践されています。PCAMPでファシリテーターを務めている森永明日夏氏は、NYの芸術団体「ピンチョンアンドカンパニー(PCC)」でTeaching Artist (TA)として多くの学校でこのプログラムを行っています。森永さんに「I am from」や演劇教育について聞きました。

Teaching Artist (TA) は日本ではまだまだあまりなじみがないかもしれませんが、NYには教育活動を行っている芸術団体が多くあり、たくさんTAが活躍しています。私は演劇のTAですが、音楽や美術、ダンスなどを専門とするアーティストもいます。「芸術教育の真の目的は、より多くの芸術家を生み出すことではなく、好奇心をもちながら、他人や自分自身のこと、物事について学び、考え、自分の力で判断する思考力をもち、人びとの人生を豊かに導くことのできる人間を育てること」です。これが米国で芸術が重要視されている理由の一つです。

そして演劇教育の目標は、「演じる技術・知識を学ぶ」のではなく、「自分の存在と意見には価値があり大切である」と、子どもたちに感じてもらうことです。そして、人前で自信をもって自分の考えをことばにし、表現する力、自分の想像力を信じてリスクを恐れない力、クラスメートと協力し貢献する力を育てていきます。

私が4年前からTAとして活動しているピンチョンアンドカンパニー(PCC)では、教育プログラムとして「シークレット・ヒストリーズ」をつくり、契約を結んだ学校にTAがチームを組んで行っています。

この「シークレット・ヒストリーズ」は、いくつかのプログラムで構成されています。主要なものとして、自分の名前や生まれた日に関することを詩にする「Name story(名前物語)」、Birth story(誕生物語)」、アイデンティティに関するストーリーを詩にする「I am from」、そして人生のなかで自分を誇りに思った瞬間、幸せだと思った瞬間、居場所がないと感じた瞬間などを詩にしていける「River story」などがあります。

生徒たちが書いた詩をTAが台本に構成し、家族やほかの学年の生徒を招待して、パフォーマンスを披露するところまでがこのプログラムです。

「I am from」との出会い

2018年に東京のせんがわ劇場で、NYから招いたファシリテーターが「I am from」のワークを実践したときに初めて関わりました。ふだんの生活のなかで、自分について語ったり、他者のストーリーを聞いたりする機会はあまりありません。しかし、「I am from」では、一人ひとりの人生の歴史、人となり、簡単なトピックからスキャフォールディング(足場づくり)で無理なく引き出し、それをパフォーマンスに創作していく過程がとても楽し



ひろしまPCAMP2022で「I am from」について説明する森永氏

く、とても意義があるアクティビティだと感じました。自分を探り、自分のことばを探し、詩で表現し、その詩をもとにパフォーマンスをつくる。この一連の過程で、バックグラウンドの違うチームメンバーと深いところで関係をつくっていく点が素晴らしいと思ったのです。

「I am from」の始まり

この「I am from」は、1993年にジョージ・エラ・リオン(George Ella Lyon)さんが書いた詩「Where I'm from」が始まりだそうです。この詩が教科書に掲載され、いろいろなところで読まれているのを演劇教育に携わる人が聞いて、読むだけでなく、いろいろな角度から活用したらいいのではないかと教育現場に応用したと聞いています。そして演劇がさかんでシアターエデュケーションのプログラムがある都市で広がっているようです。

「I am from」のような演劇的なストーリーテリング、つまり個人の物語を語ることは、一人ひとりを個性的で特別な存在にしている「それぞれの違い」と、一方で「みんな同じ人間なんだな」と実感できるエピソードに目を向ける練習になると思っています。「I am from」を通じて、自分自身について、お互いについて、世界について、感じていることについて、語ることと聞くことで、新たな発見や発想が生まれ、視野を広げるきっかけになってくれるとうれしいです。そして最終的にはそれが「平和」につながっていくと信じています。



ひろしまPCAMP2022でファシリテーターを務めた5人。森永氏は左から2番め。



PCCの「シークレット・ヒストリーズ」はこちらからご覧いただけます。

参加者の声

プログラム直後

Q: いちばん楽しかったこと、うれしかったことは何ですか。

- ・仲間思いの友だちがたくさんできたこと。
- ・これからも続いていきそうな大事な仲間ができたこと。
- ・みんなと一つの作品をつくったこと。
- ・いろんな言語にふれたこと。

Q: いちばん難しかったこと、困ったことは何ですか。

- ・覚えることが難しかった。
- ・みんなで合わせるものが難しかった。
- ・意思を伝えるのが難しかった。そしてただ難しかっただけでなく、言語の違いで、何を伝えているのか理解できないことが悔しかったです。私も英語やポルトガル語、タガログ語を話せたりしたら、もっと大きくなつなごうができたのになあと思いました。

Q: 気づいたこと、学んだこと、変化したことは何ですか。

- ・大きくなるにつれて、人前で自分を表現したり自分のことについて話すのが、なんとなく恥ずかしくなったり、変なプライドが邪魔したりしてた。でも、みんなはじめましてで、4日間の仲間だからこそ、自己表現をいっぱいしてみた。そうすると、だんだんと何も知らない相手を尊重したり、理解したりできるようになった。自己開示をすることは人

- と人とを心からつなげるんだなと感じた。
- ・みんながとてもフレンドリーだったので僕の心がいつもとは違ってとてもリラックスしていることに気がつきました。
- ・同じ高校生でも考え方が全然違って意見も違って考えることが楽しかったです。
- ・一人ひとり好きなことや苦手なことがあるから、助け合うことで強いつながりをもてることを感じた。
- ・I noticed that no matter what and who you are we are all the same and equal. We must help one another even if others can't understand you through words but you can interact with them with your body language. It helped me to be more comfortable with others when I'm communicating and making new friends.

Q: ひろしまPCAMPでの経験を一言で表現してください。

Power / 挑戦 / 素晴らしい / The best experience / コミュニカ高まった / Accomplishment / 1歩踏み出せた / 久しぶりに舞台上で発表して初めて神楽も見た / 最高の思い出をつくることができる! / 楽しい / 交流が楽しかった / Friends / 幸 / PCAMP最高!! / それぞれのキャラクターが見せる軌跡の日々 / 第2の家族との思い出 / 可能性 / 成長 / 無限の可能性 / 人生の大きな糧になりました! / 成長 / 一生の仲間 / 濃いひととき / JUMP! / 最高の思い出 / Advance / Memorable / The most memorable moments of my life.

半年後...

PCAMPが終わって半年後に参加者や保護者に、PCAMPでのいちばんの思い出や、その後の変化についてインタビューしました。

インタビュー動画はこちらから ▶



ひなた

(合宿の前と後とは)積極的に行動するという面で成長できた。多くの人の前で主張することが苦手だったけど、少し自信ができました。合宿のあとに就活の面接があって、合格しました。PCAMPの影響が大きかったです。

ひなた母

人付き合いが難しいところがあるので、初めての人たちとの集いのなかでどうかと思ったけど、本人は頑張ったみたいだし、コミュニケーションを取れたと思っているみたいです。そういうのが体験できたこと、特別な力ではないけれど形にすることを体験できてよかったし、発表会を見て鳥肌が立ちました。



セラ

自分の本当を出せたので、自信がついたと思います。もっと世界中の人たちと友だちになりたいです。

セラ母

PCAMPの帰りの車の中で、「ああ、ぼくもう普通の日本人のふりをしなくていいんだ」って言ったんですよ。それを聞いたときに、どれだけ普通の日本人であることを求めているのか、どれだけしんどかったのかなと思いました。



ニリマ

PCAMP後も連絡を取れる仲間を見つけた。4日間でこんなに仲良くなれると思っていなかった。自分に自信があまりなくて、学校ではあまり自分から話しかけないけど、PCAMPでは自分から話しかけることができ、いまも自分からコミュニケーションを取れるようになりました。



クリス

前は人に話しかけられなかったんです。でも今はすっごく「大丈夫?」「手伝おうか?」って自分から話しかけられるようになりました。どんなことをしてどんなふうには変わったのか、何が楽しかったのかをみんなに教えたいと思っています。



もえぴー

文化祭もコロナでなかったので、文化祭みたいで楽しかった。作品をつくるときにコミュニケーションを取ることが重要だったので、自分の意見ばかりじゃなくて、相手が何を思っているのかを考えられるようになりました。



概要・歩み | 募集情報・お知らせ | 実施報告 | フォトギャラリー | 動画 | よくある質問 | お問い合わせ



多文化 × 芸術

芸術表現を触媒にさまざまな言語的・文化的バックグラウンドをもつ高校生がまざりあう交流プログラム

パフォーマンス合宿 (PCAMP) って? →

2023年3月に
全面リニューアルしました!



コーナー紹介

募集情報・お知らせ

PCAMPだけでなく、PCAMPに関連したプログラムの募集情報やお知らせを掲載



フォトギャラリー

実施形式(対面・オンライン)や実施年、開催地、アクティビティなどのキーワードで検索できる



動画

15分程度のダイジェスト版と1時間半程度の記録版を掲載。キーワードで検索できる



実施報告

実施回ごとにテキスト・写真・動画をまとめて掲載



Facebook

PCAMPに関連したレポートを随時掲載



概要・歩み



PCAMPの立ち上げ

第1回「パフォーマンス合宿」を実施するにあたり、2017年8月に、「多文化を背景にもつ子どもの支援者会議」&「にじいろのさかな」ワークショップを開き、多文化活動の第一線で活躍している方々に助言をいただくとともに協力をお願いした。

全国版開催

2018年3月全国版PCAMP【対面】(3泊4日、東京)

演劇
ダンス

参加者：日本在住の高校生等30名(アメリカ、オーストラリア、韓国、タイ、台湾、中国、日本、バングラデシュ、フィリピン、ブラジル、ボリビア、ロシアにつながりをもつ)

2019年3月全国版PCAMP【対面】(3泊4日、東京)

音楽、映像
造形、ダンス

参加者：日本在住の高校生等31名(インド、オーストラリア、韓国、中国、日本、ネパール、フィリピン、ブラジルにつながりをもつ)

新型コロナウイルス感染拡大により対面が中止に
2020年3月PCAMP(全国版)@東京【対面】→中止
2020年8月PCAMP(地域版)@広島【対面】→中止

オンラインでの開催

対面プログラムでは、最終日の発表会で、参加者全員でパフォーマンスを披露することをゴールにしたが、オンラインではそれができない。チームごとに音楽、造形、ダンスで構成する映像作品をつくり、発表することにした。オンラインになったことで、参加対象が国内の多様な高校生等から、海外の日本語学習者、継承日本語学習者まで広がった。

2020年8月夏プログラム【オンライン】(5日間)

音楽、映像
造形、ダンス

日本・海外在住の高校生対象
参加者：20名(インド、オーストラリア、韓国、シンガポール、セネガル、タイ、中国、日本、フィリピン、ベナン、マダガスカル、ミャンマー、ロシアにつながりをもつ)

2020年11~12月秋プログラム【オンライン】(6日間)

音楽、映像
造形、ダンス

日本・海外在住の高校生対象
参加者：日本在住の高校生9名、海外在住の高校生9名の計18名(イギリス、韓国、中国、日本、マレーシアにつながりをもつ)

2021年3月春プログラム【オンライン】(6日間)

映像、演劇
ダンス、VR

日本在住の高校生対象
参加者：日本在住の高校生16名(アメリカ、台湾、中国、日本、マレーシアにつながりをもつ) / 演劇を組み込むために初めてVRを活用することに。VR機器の貸し出しを行うため、対象を日本在住の高校生とした。

2021年8月夏プログラム【オンライン】(6日間)

音楽、映像
造形、ダンス

日本・海外在住の高校生対象
参加者：日本在住の高校生13名、海外在住高校生6名の計19名(アメリカ、韓国、中国、日本につながりをもつ)

2022年3月春プログラム【オンライン】(6日間)

映像、演劇
ダンス、VR

日本在住の高校生対象
参加者：日本在住の中学生1名、高校生13名の計14名(アメリカ、イギリス、カナダ、日本、マレーシアにつながりをもつ)

地域版のスタート

コロナの規制が緩和され対面の再開を機に広島で初の地域版を実施。

2022年8月地域版PCAMP(ひろしまPCAMP2022)【対面】(3泊4日、広島県安芸高田市)

演劇
ダンス

広島県に在住または通学している中高生対象
参加者：中高生28名(中国、日本、ネパール、バングラデシュ、フィリピン、ブラジルにつながりをもつ)

2023年2月【特別企画】PCAMP×地球講座【オンライン】(2日間)

演劇
音楽

日本・海外在住の中高生対象
参加者：韓国、中国、日本在住の中高生計18名

※PCAMP開始からの5年間を総括した報告会を2023年5月に開催。報告会の内容とインタビュー動画などを本ウェブサイトに掲載しています。

こちらから
ご覧いただけます。



同じ惑星に共に在る

現在私たちが直面している課題の多くは、その解決のために国や地域を越えた協力が欠かせません。特に喫緊の課題である地球温暖化は地球全体で取り組まなくてはなりません。自分の地域から遠く離れている異常気象や災害であっても実は自分の地域とつながっていることが多くあります。自分たちの地域で起こっている事象を地球全体のつながりのなかでとらえる視点をもつことが、地球全体の課題への意識を高めることとなります。そこで、2021年度に開始した「地球講座」では、そうした地球の視点を獲得し、さまざまな地域の人たちと同じ惑星に共に在るという「共在感」をもつこと、さらに利他的に連帯・共生するための関係をつくっていく姿勢を育むことを目標としています。

2022年度は「夏至」と「冬至」の日に世界各地をつなぎ、各地のレポーターが日の入りの様子をライブ中継し、画面を通して共有することにしました。さらに、レポーターによる地域の気象や自然災害などの報告を、竹村真一氏がデジタル地球儀「SPHERE」を使って、グローバルな視点からとらえ直して解説しました。解説後、オーストラリア、韓国、中国、日本からの参加者はグループに分かれ、意見交換を行いました。



クライストチャーチ (NZ)

14:04

SPHERE
科学的知見や統計に基づき、気象・海流・海水温・大陸移動・温暖化予測などの地球上で起こっている現象や、過去から未来までの環境変化をリアルに映し出すデジタル地球儀

夜のリレー

昼夜の境界線が少しずつ移動していく。数字は夏至の日の入り時刻(日本時間)



メルボルン

16:09



パース

18:20



広島

19:27



上海

20:01

各地から日の入りのライブ中継

「夏至」の日には、オーストラリアのメルボルンとパース、韓国のソウル、中国の上海、広島を、「冬至」の日には、イギリスのエディンバラ、韓国のソウル、中国の上海、オーストラリアのメルボルン、マレーシアのコタキナバル、北海道をつなぎました。

夏至の回では、18時に開会すると、すでに日の入りが終わったメルボルンを皮切りに、日の入り10分前のパース、その1時間後には広島から、さらに30分後にはソウルから、最後は上海から、暮れてゆく空のライブ中継がされました。ライブ中継後には、竹村氏がSPHEREに昼と夜の境界線を示して、どのように日が沈むのか、また南半球と北半球の季節の違いを解説しました。

夜がまるでリレーされていくかのような様子をライブで共有し、さらにSPHEREでその様子を俯瞰して見ることで、参加者は時差を体感すると同時に、画面を通してその場にいる人たちと同じ地球にいることを実感しました。

写真はすべて©中西祐介



いまのままのCO₂排出を続けると

パリ協定*の目標が達成されたら

50年前、地球はまだ青かった

1978年

2000年

2100年

2060年

2030年

2100年

2060年

2030年

希望の時代に生きていく
このままCO₂を排出し続けるとどうなるのか。SPHEREに現在と同量のCO₂を排出し続けた地球の姿を映しました。地球は真っ赤になり、2100年には白熱化してしまいきます。では、パリ協定が守られればどうなるのか。目標数値を入れてシミュレーションすると、地球が白熱化すること

はガンジス川、インダス川、揚子江、メコン川などにとって重要な水源で、「アジアの水銀行」と呼ばれています。これらが溶けて一度に大量の水が放出されると、流域では洪水となります。そして、溶けてなくなってしまうあとは干ばつが起こると説明しました。この現象は、世界で起こっている問題であり、このまま手を打たないと、2050年くらいには世界で40億人が極度の水ストレスにさらされると指摘しました。さらに、気候区分が変化していることをSPHEREに映し、温帯がこの10年で6キロ北上しており、これまでに農作物ができていた所で採れなくなり、逆にできなかつた土地で生産できるようになることも起こるだろうと言います。そして、このときに必要なのは、農作物が採れるようになった地域が採れなくなった地域に送るなど、地球全体で融通していく力だと述べました。

***パリ協定**
パリ協定は、2015年にパリで開かれた「国連気候変動枠組条約締約国会議（通称COP）」で合意され、2016年11月に発効した。「世界の平均気温上昇を産業革命以前と比べて2度より十分低く保ち、1.5度以内に抑える努力をする」という世界共通の長期目標が掲げられた。

空の二酸化炭素濃度の年間の変化をSPHEREに映します。「工業地帯がないシベリアでCO₂濃度が高くなっています。これはヨーロッパの工業地帯から排出されたCO₂が偏西風に乘って流れてくるからです。ところが、6月に入ると、その濃度は低くなっていきます。シベリアの森が盛んに光合成を行い、CO₂を吸収しているからです」と森林が大きな役割を果たしている」と説明します。遠くのシベリアの森林が実は自分たちにとって大きな宝だということに参加者は気づいたようでした。

・豪雨と干ばつはコインの表と裏
冬至の回で報告されたのは、2022年の北海道、ソウルの豪雨と揚子江の干ばつでした。揚子江周辺では作物が収穫できなくなっただけでなく、船で物資が運べなくなったり、水力発電ができず工場が稼働できなくなったりするなど大きな影響が出ました。竹村氏は、同年にパキスタンで大雨の影響で川が決壊し大勢の死者が出る災害が起こったことに言及しました。そして、このパキスタンの洪水と揚子江の干ばつという二つの災害の大きな原因が実は同じで、ヒマラヤの氷河にあると指摘しました。ヒマラヤの氷河

各地の自然災害レポート

日の入りのライブ中継の間には、各地でどんな自然災害が発生しているのかを写真などをまじえてレポートが報告しました。夏至の回では広島と上海のレポートから、豪雨とその被害について、ソウルとパースのレポートから、山火事とその後の対策などについて報告がありました。また、冬至の回では、北海道とソウルからは豪雨、上海からは猛暑と揚子江の干ばつについてレポートがありました。

・二つの豪雨の原因を解説

竹村氏は、広島と上海の豪雨のレポートをうけSPHEREで雲の動きを示しながら、南シナ海からだけでなく、インド洋から流れてくる水蒸気がヒマラヤ山脈を越えられずに中国南部と日本に届くこと、地球温暖化によってインド洋の水温が上昇、水蒸気が増え、豪雨につながったことを説明しました。

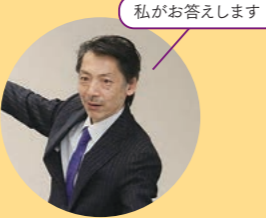
・山火事の原因を解説

竹村氏は韓国やオーストラリアだけでなく、アフリカや南米などでも山火事が多く発生していることを紹介しました。森林がどのような役割を果たしているのか。竹村氏はシベリアの上

が避けられることがわかります。「これらのシミュレーションからわかるのは、私たちは未来を変えられるということですよ」と竹村氏は語ります。そして、「30年前は環境破壊などの問題があっても解決する方法はあまりなかった。今は太陽光で発電したり、水蒸気を集めて農業をしたり、海上に都市をつくらたりするなど、問題もあるけれどそれと同じぐらいの解決策も見えてきた希望の時代で、参加者の皆さんにはものすごく大胆に発想してほしい」と参加者にエールを送りました。

夏至、冬至の回ともに参加者は、大雨や干ばつの原因、地球温暖化の変化をSPHEREでまざまざと目にしました。そして、一カ所で行ったことがほかの地域、ひいては地球全体に影響を与えることも地球を俯瞰して見えてきました。これからは希望の時代にしていくためにも、地球の視線をもつことが重要であることを改めて認識しました。

講座終了後、参加者から寄せられた質問に対する竹村氏の回答



私がお答えします

Q 私に住んでいる所では気候が変わってきて、トンボが減りました。トンボが減ることでほかの生物が減るのではないかと思います。食物連鎖が崩れてしまっても元に戻すことは可能ですか？

A 食物連鎖が崩れてしまっているのは、土壌微生物や植物動物とのパートナーシップが成り立っていないからです。海の汚染の原因にもなっています。SDGsの17項めは「パートナーシップで目標を達成しよう」です。ジェンダー、民族、人種など多様な人と差別などを超えて関係を築いていくことはとても良いことですが、人間界に閉じこめるのではなく、ほかの生物や微生物まで含めたパートナーシップを組んでいくと、食物連鎖も再生できると思います。

Q 戦争は環境に影響しますか？

A 兵器の使用は環境を破壊したり大量のエネルギーを消費したりします。戦争が環境に負荷を与えるということは間違いありません。しかし、逆に「環境は戦争に影響を与える」という点に注目することが大切です。環境が悪くなると、水や食料のストレスにさらされて難民が出たり、内戦が起こったりします。例えば2010年当時、中東各国は干ばつなどによる影響で食料の不作に苦しんでいました。加えて穀倉地帯であるロシアやウクライナの小麦の収穫が半減し、輸出が禁止されたことで、飢餓人口の増加、食料の高騰等が起こりました。これがアラブの春といわれる中東・北アフリカ地域の各国で本格化した民主化運動の引き金となりました。実は地球環境の変化が、戦争の背景にはあるのです。だから、環境が戦争に影響を及ぼすという点に注意すべきかなと思います。

Q 50年後に全人類が地球に住むことは可能でしょうか？

A もちろんYesです。エネルギーも食料や水の使い方も無駄が多いですね。肥料も大量に投入していますが、ほとんどが海や川に流れて水を汚染しています。微生物(土中の菌類など)とパートナーシップが取れていないため、肥料をあげてもほとんど吸収されずに汚染ばかり起こしているというわけです。ですが、電力消費は1/10にできる技術が開発されつつありますし、節水型のシャワーやトイレによって1/50の水で生活できるような技術がアフリカや南アジアなどで普及しています。

暮らし方の無駄を改善していけば人口が100億人を超えても少ない資源やエネルギーの消費でサステナブルにやっつけていける見通しは立っています。しかし人類社会の構造が、20世紀の大量消費・大量廃棄型からまだ抜け出せていない。やっとな、エネルギーの分野で変わりつつあって、ほかの分野でも本気で進めていけば20年ぐらいで状況を大きく変えていけると思います。

*質問・回答は一部編集しました

アンケートより

おもしろいと感じたことや新たに興味をもった話題は何ですか？

- 世界のいろんな場所の景色を見ることができたり、世界で起こっていることについて知ることができおもしろかったです！(広島、17歳)
- このイベントに参加して、現在の地球環境はとてもおもしろいと思いました。なぜなら、現在、地球温暖化が進んでおり、気候も変わってきていますが、私たちの対策によって地球の未来を左右できるからです。(京都、13歳)
- 私はこれまで海面上昇によりツバルの国々が危険にさらされているということに興味がありました。しかしそれは、海面上昇という問題を身近に考えられていないということだと、お話を聞いて感じました。日本の人口の約半分は低地に住んでいて、主要な機関がたくさんありますが、そのような地域こそこれから洪水が増加していくなかで最も被害を受ける場所であると知りました。私も、日本の1人の若者としてまずはどんな課題があるのかを知っていきたくと思いました。(東京、15歳)
- 発生する気候変動とそれによる被害を見ると、韓国だけでなく多くの国々で影響が大きくなっていることに気づきました。各国がより多様で詳細な項目を含む協定を締結することで、気候危機に対処できるはずです。(韓国京畿道、17歳)
- 地球はとてもおもしろく、未来の地球の状況について関心が高まりました。(中国上海、18歳)

【事業データ】

地球講座 The LIVE「夜のリレー」メルボルン・パース・広島・ソウル・上海をつなぐ2時間
 期日：2022年6月22日(水)
 場所：オンライン
 主催：公益財団法人国際文化フォーラム(TJF)
 企画制作：NPO法人ELP(Earth Literacy Program)
 講師：竹村真一(NPO法人ELP代表、京都芸術大学教授)
 レポーター：5名(広島、韓国・ソウル、豪州・パース、メルボルン、中国・上海)
 参加者：60名(日本の中高生、中国の高校生、韓国の高校生、オーストラリアの大学生)

地球講座 The LIVE「夜のリレー」北海道・ソウル・上海・メルボルン・コタキナバルをつなぐ150分
 期日：2022年12月22日(木)
 場所：オンライン、東京(対面)
 主催：公益財団法人国際文化フォーラム(TJF)
 企画制作：NPO法人ELP(Earth Literacy Program)
 講師：竹村真一(NPO法人ELP代表、京都芸術大学教授)
 レポーター：6名(北海道、英国・スコットランド、韓国・ソウル、豪州・メルボルン、中国・上海、マレーシア・コタキナバル)
 グループワーク協力者：朝田航太(ファシリテーター)、ハビブウラファティマ美弥(ファシリテーター、英語逐次訳)、堀越春香(韓国語逐次訳)、三浦遼憲(韓国語逐次訳)、三浦明子(中国語逐次訳)、山岸美瑛(ファシリテーター、英語逐次訳)
 参加者：82名(日本の中高生、中国の高校生、韓国の中高生、オーストラリアの高校生)

地球とわたしのつながり

多言語・多文化交流「パフォーマンス合宿」(PCAMP)は、2018年

に対面交流として始まり、コロナ禍により2020年度からはオンラインで実施してきました。コロナの規制が緩和されたことで、2022年夏に広島県で対面のPCAMPを再開しましたが、オンラインの利点もあることから、特別企画として、「地球講座」と連携したオンライン版PCAMPと2023年2月に実施しました。この特別企画でも、これまでのPCAMPと同様に、バックグラウンドの違いを超えてコミュニケーションを図ること、異なる他者の理解、自己表現や創造性を促進することなどを目標とし、地球講座で大切にしている「地球大のつながり」をテーマに掲げました。韓国、中国、日本の中高生18名に加え、日本、マレーシアからサポーター*4名と言語サポーター1名の23名が参加しました。参加者は、自分と地球とのつながりや人とのつながりを体感し、それを表現するパフォーマンス作品をつくりました。

*多言語・多文化交流「パフォーマンス合宿」に参加したことのある高校生や大学生

地球大のつながり

国や地域を越え、地球大のつながりを体感してもらうために、最初に地球講座の講師でもある竹村眞一氏にデジタル地球儀「SPHERE」を活用し、身近で起こった事象がどのようにほかの地域とつながっているのかなどについてレクチャーをしてもらいました。SPHEREに現在の上空の様子を映すと、雲がどんどん流れていきます。高気圧のシベリアから、低気圧の日本に向かって空気が下りてきて、2月の終わりの日本やソウルに雪をもたらすのだと、竹村氏が説明します。また、ユーラシア大陸のタクラマカン砂漠から流れてくるものは雲のほかにも黄砂があります。黄砂は迷惑がられますが、鉄分やミネラルなどを含んでいるので、農業に適した土地をつくったり、海を豊かにしている面もあると竹村氏は話しました。

こうした地球のつながりは、ブラズだけではなくマイナスな事象にも及びます。PM2.5のデータをSPHEREに映し出すと、PM2.5はヨーロッパからシベリアを渡っ

は自分の空しか見えない。だからそう感じることは少ないけど、いま地球儀で見てつながりを感じた」といった感想が上がりました。

また、レクチャーを聞いたあとの気持ちや、絵などでも表現してもらいました。

詩を書く

PCAMPではアメリカの多文化演劇教育で使われているプログラム「an fon」を取り入れています。参加者

はキーワードに沿って、自分のこれまでを振り返り、「an fon」の詩にいきます。今回は「地球のつながり」をテーマにしたことから、みんなでの地球を共有しているという意味で、「We are from」の詩をつくることにしました。そして、詩のキーワードを地球と自然に関するものに絞り、以下の三つを提示しました。

- ・思い出に残っている自然(地球)
- ・残したい自然(地球)の風景
- ・2023年のわたしと地球

チームで作品づくり

詩を書いたあとは、4〜5名のチームに分かれて、各自の詩と事前課題として準備していた「自分と地球・自然に関する写真」を紹介しました。事前課題は、自分の身の回りの自然や地球を写真に撮ることで、自分と地球とのつながりを想起してもらうこと、さらにチームで交流するときに写真を切り口にするので自分の思いを表現しやすくすることがねらいとしてありました。

各自の事前課題と詩「We are from」

参加者がつくった We are from

思い出に残っている自然(地球)
We are from 近くの海
小さいとき、お父さんと兄弟と釣りをした
また一緒にいきたいな
by そら

残したい自然(地球)の風景
We are from きれいな海
夏にきれいな海に行くのが楽しみ
海はきれいでなくちゃいやだ
by つぐ

2023年のわたしと地球
We are from お母さん
寝るときは、暗く落ち着けてくれる
起きるときは、明るく起こしてくれる
そんな地球は、ぼくにとってのお母さんだ
by くま

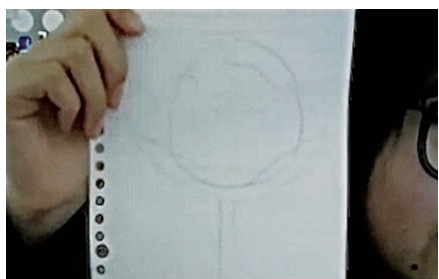
ジェスチャーと絵で表現



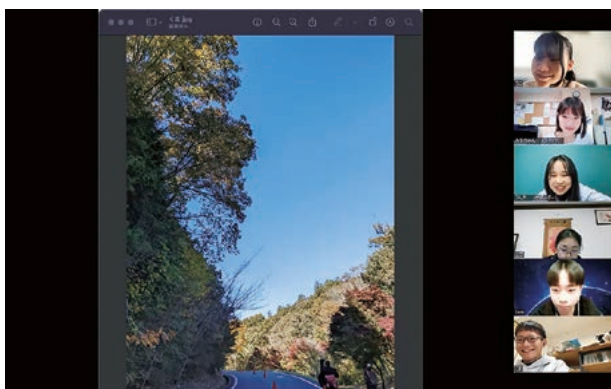
顔を両手で押さえるポーズ：(温暖化による地球の気温上昇の予測図を見て)50年後、自分たちはまだ70歳くらいなのに、あんな状況になってしまうことに恐ろしさを感じた。
ガッツポーズ：世界やばいじゃん！ と思って、国とか関係なくがんばろう！ と思った。



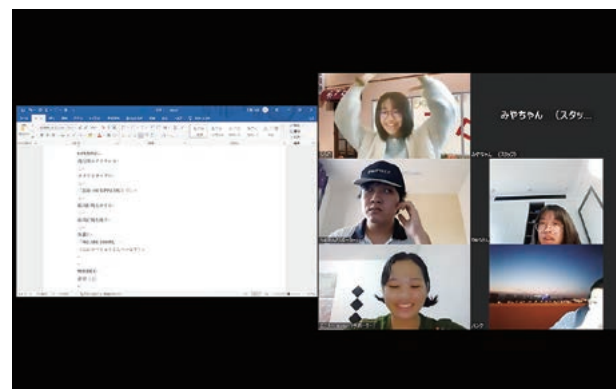
地球の前でナイフと布を持つ人：地球を大事に、磨くこともできるし、ナイフで刺す(痛める、破壊する)こともできる。私たちにはどちらかを選ぶ力があるから、自分たちが生きやすいほう、大事にするほうを選ぶことが絶対いいなと改めて考えた。



地球の周りに花(がく)と茎：地球を守るイメージ。



チームに分かれ、作品づくりをする。



発表会後の振り返りから

2日間最初からほんまに楽しんで、楽しくて。日本人じゃなくても、こんなに心が通い合えるんやっていうことを初めて知ってわくわくしたし、1対1で話して言いたいことが通じたことも2人でうわーって喜んで、楽しんで仕方ない2日間でしたのありがとう

昨日空を見上げて雲が目に入ったの中国とか韓国とかから流れてきたのかなあと思って、ってことはみんなが見てたりするのかなって思って温かい気持ちになった。世界はものすごい広いけど、友だちがいることで他人事じゃなくなるから、小さいときに言っていた「世界中が友達になれば平和になるね」というのもあながち間違いないのかなって思っていて、楽しいいい経験になってうれしいです。

私はみんなの前でパフォーマンスすることがちょっと嫌いな気持ちがあります。今回はチームワークが自然に皆さんの前で自分の考えとか言いたいことをちゃんと伝えられてとてもうれしかったです。

これまで参加してきたイベントとはずいぶん違う。日本語が上手ではないから、全部日本語で話すの、どうしようと思ったけど、この雰囲気は全然緊張しないし、楽しめた。

めっちゃくちゃ楽しかった、ほんとに。はじめ、このプログラムに参加しようと思ったときに、三つも違う国の人がいて、うまくいかなさうな気がしたけど、ほかの国の人たちが自分の国のことを話そうとしてくれるのを見るとすごくうれしくて、だから自分も、中国語、韓国語に興味が出たので、これから勉強していこうかなと思った。

みんなが優しくしてくれて勉強になりました。地理的な距離はあっても、心がつながっている。

最初不安だったけど、みんな優しく楽しかった。学校でこんな短期間で仲良くなれないから、日本人だけじゃなくて、韓国、中国の人と短時間でいっぱいしゃべれるようになって楽しかったしうれしかった。

【事業データ】

多言語・多文化交流「パフォーマンス合宿(オンライン版)」×「地球講座」
 期間：2023年2月25日(土)、26日(日)、9:00～12:00 13:00～15:00(日本時間)
 場所：オンライン
 主催：公益財団法人国際文化フォーラム(TJF)
 助成：公益財団法人三菱UFJ国際財団
 協力：NPO法人ELP(Earth Literacy Program)
 地球講座講師：竹村真一(NPO法人ELP代表・京都芸術大学教授)
 ファシリテーター：森永明日夏(舞台俳優・ティーンエイジャーアーティスト)
 サポーター：山岸笑瑠(対面第1回参加者、対面第2回・オンライン第5回サポーター)、
 鷲澤凜輝(オンライン第2回参加者、オンライン第3回・第4回サポーター)、古田小桜(オンライン第3回参加者、ひろしまPCAMP2022サポーター)、中村和奏(オンライン第5回参加者)、Tang Yoon chuen(言語サポーターとして参加)
 参加者：高校生17名、中学3年生1名、合計18名(日本9名(東京、神奈川、千葉、滋賀、長崎、熊本)、韓国2名(ソウル、京畿道)、中国7名(上海、北京、吉林省))
 参加費：無料



作品の動画はこちらから

2日間を振り返って

これまでオンラインでのPCAMPは5〜6日間の日程で行っていましたが、今回はその半分以下の2日間。いかに早く距離を縮めるかが、交流の深まりに影響するため、事前にチャット

ツールを使って自己紹介をしたり、コメントを付けたりすることを促しました。また事前課題をチームでシェアするときも、最初から撮影した人が紹介するのはなく、どこなのか、何の写もらうと、「どこで撮ったの?」「これはなに?」「きれいだね!」「どうやって撮ったの?」などのコメントが次々と出て、距離がぐっと近づいたようでした。また、海外からの参加者は日本語学習者で、学習期間が異なっていたため、日本語レベルもさまざまでした。2

日めの作品づくりの話合いでは、スムーズに進むように言語サポーターに入ってもらいましたが、1日めはあえて「言語サポート」なしでチームの活動を行いました。そうすることで、自分の言いたいことを伝え、ほかの人のアイデアを理解するにはどうしたらいいのか、自分たちで考えて協力し合っていました。

「伸びたと思う力」には、言語レベルやコミュニケーション力などが挙げられていました。しかったこと」として、いろんな人と仲良くなれたことや、みんなと作品がつくれたことなどを挙げた人が多く、「伸びたと思う力」には、言語レベルやコミュニケーション力などが挙げられていました。

チームの作品

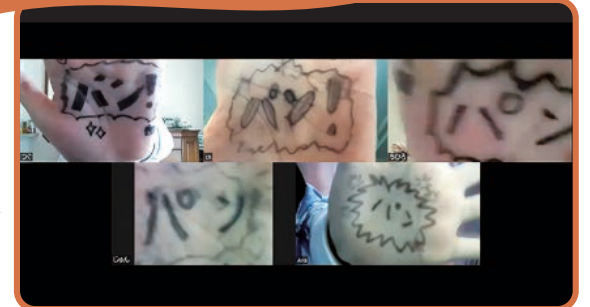
五彩斑斓的黑チーム



好きな景色やお気に入りのものを紹介し、最後は1人ずつ「私たちはみんなつながっている」を言ったあとに、自分の残したい自然・地球を表現した。

「We are from 守りたい。海や山は汚されている。ごみ拾いをして守っていく(中略)どんなに小さなことだとしても一人ひとりの意識で変わるよ、地球の未来」

はなびがパンパンチーム



手のひらと手の甲に「はなびがパンパン」と書いて、手を開いたり閉じたりして動きを出した。最後は「平和」を韓中日の3言語で言った。

「We are from 中国の長白山の白い雪と雲がたなびく山裾。舞う雪の花がまるで花火のようだ。環境を大切に自然と仲良くする」

Ruahaチーム



飛行機内の出発アナウンスが流れ、一人ひとりが紙飛行機を飛ばす。事前課題の写真を背景に、好きな風景について思い出をまじえて語り、「おかえり」「ただいま」とみんなで言ったあと飛行機の到着アナウンスの声で締めくくった。

「We are from きれいな夕日。赤だけじゃない、虹色の空。ある日は桃色、ある日は紫。黄色く色づく雲。私はいつも思う。もっと新しい景色が見てみたい。ここが私の旅立ちの場所」

ツナマヨおにぎりチーム



メンバーが弾くギターにあわせて好きなものを持ってみんなが登場し、「We are friends!」で始まった。詩を読み終わる度に手でハートを作り、「だいすき」を英韓中日の4言語で言って締めくくった。

「We are from ふるさと。アメリカ、日本、中国、韓国、誰の故郷でもあるこの地球。私たち全員で守っていききたい」

人と向き合い、物語を紡ぐ

「ときめき取材記」プロジェクトでは、学生が関心のあるテーマで気になる人にインタビューし、聞き書きの手法でまとめた記事を「ときめき取材記」ウェブサイトに掲載することを目標にしています。2022年度は7校で60名以上の学生が取り組み、計23本の記事が掲載されました。

プロジェクトが実施されている授業は、「日本事情」「日本語」「多文化教育」などさまざまで、授業の目的も対象も異なります。対象は、日本語を第一言語とする学生、海外からの留学生、海外で日本語を学ぶ学生などで、日本人学生と留学生の「共修」もあります。また、ひとりで取り組むケースもあれば、グループの場合もあります。さまざまなバックグラウンドの聞き手が、それぞれの地域で、あるいはオンラインを使って遠くの地域に暮らすさまざまな職業の人たちに話を聞いてまとめた記事は、テーマにおいても内容においても多様性に富んでいます。

テーマから日本社会を見る

ウェブサイトでは、記事を12のジャンル(「移住」「社会」「暮らし」「アート」「デザイン」「教育」「伝統」「食」「エンターテインメント」「スポーツ」「動物」「テクノロジー」「シニア世代」)に分け、さらにそのジャンルの下にテーマを設けています。

ときめきプロジェクトでは「人」にフォーカスしますが、クラス全体でテーマを一つ決めて取り組む所もあります。2020年度からときめきプロジェクトを授業に取り入れている法政大学の「多文化教育」では、毎年度「境界線を越えて協働する」をテーマにしています。学生はこのテーマに沿った人を探す前に、「境界」のとらえ直しから始めます。日本と海外間といった地理的な境界線だけでなく、日本の社会にどのような境界線があるのかという視点で社会を見つめるのです。そして、どのような考えで仕事をしているのかについて話を聞きます。やさしい日本語の普及活動を行っている方、イ

ギリス出身で着物研究者として着物文化の発信を行っている方、クラシック音楽の指揮者であり「クラシカルDJ」という新しいジャンルを開拓した方、新宿二丁目でLGBTQバーを経営している方、在日コリアン向けのブライダルヘアメイクをしている在日コリアン3世の方……など、学生がとらえたさまざまな境界を越えて協働している方々が登場しています。

グループでの学び

京都教育大学の日本語の授業では、グループでときめきプロジェクトに取り組んでいます。この授業を担当している上田安希子氏は、グループワークの難しさの一つとして、グループメンバーの興味関心が異なるときの調整を挙げます。あるグループでは、日本のアニメや漫画に興味をもつタイプの留学生2人と、日本の人たちが核兵器をどう見ているのかを知りたいというウクライナの留学生間で、何をテーマにするのか決めるのが難しかったと言います。そしてたどり着いたのは、日常をユーモアをまじえて切り取って描く漫

ひとりで取り組むことの重み

一方、秋田大学の「日本語」では、ひ

ときめき取材記



アバサさんのお話を聞いて印象に残ったことは、「マイノリティーの立場に立つことによって社会問題への意識が高まる」ということだ。わたしたちはふだん、マイノリティー側のことを考えているつもりでも、実際は理解できていないかもしれない。幅広い知識をもち、自分がどんな立場でも違う立場の相手のことを思いやれるようになりたい。



今美大に通っているなかでなかなか自分がつくった作品と社会のつながりを想像できなくて自己満足な作品をつくるにとどまっていますが、社会に作品を媒体として関わっていく方法を模索していきたいと強く思いました。その力がアートにはあるのだなとお話を伺って再認識できました。



今回のインタビューで、移住に対する考え方が変わりました。今までは移住することの定義を「目標があってその土地に向かい、その土地のことについて知るだけでなく現地の生活や文化に関わり、溶け込んで同じように振る舞うということ」ではなかったかと考えていました。でも、お話を聞いて、「同じように振る舞ってなじむ」というのはあくまで私の保守的かつ個人的な考えであり、世界には多様性がある自分も相手も個々に良い点があるのだから、お互いの違いを知って認め合えるようにコミュニケーションを取っていくことが大切なのだと学びました。そして私も自分らしくコミュニケーションができるように、自分自身の軸(好きなこと)をしっかりとって行動していきたいと思いました。



きっかけは偶然であっても与えられた場所を最大限に活用して自分の糧としそこから自分のしたい研究へ組み込んでいく意欲に驚かされました。私自身日本のことについてどれほど知っているか、他国の人へその良さをどれほど伝えられるか自信がもてません。なのでフーリさんが日本語も一つのアイデンティティであると自信をもっておっしゃる姿がとてもかっこよかったです。自分のアイデンティティとは何か。自分と日本文化の関係性をもう一度見直すきっかけとなりました。



日本料理人としての職人精神そのものは何か、どのように貫いているのかなどをしっかりと教えていただきました。有意義な人生を歩んでいきたいなら、自分自身に責任をもつ覚悟、幸せを伝える能力、根性ある心を保つたほうが良いと学びました。初めてのインタビューでしたが、日本語を勉強して良かったです。そして、他人のために日本語を使って良かったです。世界はコミュニケーションで美しくなります。私はこれからも言語を学習し続けていきたいし、文化交流のために言語を活かしたいと思います。

学生の学び

各記事の末尾にはインタビューした学生の感想を掲載しています。インタビュー前に知りたいと思っていたことを聞いたことで充足感を得る学生もいますが、想像していたものとは異なる回答が返ってきたり、思いも

ない話が聞けたりして

驚く学生もいます。しかし、多くの学生は、インタビューの仕事や生きることへの真摯な姿勢、ぶれない信念もちそれを貫く生き方、その背景にある努力と苦労など、その人の人生の一部を受け止めることで、自分のことを見つめるようです。

なぜ聞き書きなのか

ときめき取材記プロジェクトでは、聞き書きの手法を使って、インタビューの人物像が浮かび上がってくるような記事をめざしています。聞き書きとは、相手にじっくりと仕事や人生について話を聞き、相手のことばでまとめていくものです。一人称で書くことが多いのですが、ときめきプロジェクトでは日本語を第一言語としない学生も多いことから、Q&A形式でもいいことにしています。

聞き書きの手法では、自分の価値観や先入観を入れずに、相手のことばをまずは受け取ります。さらにインタビューをすべて文字化する過程で相手への理解をさらに深めます。そして、それを記事にまとめるときに、その人の立場や状況に自らも身を置かれたような追体験をすることもあります。この過程がひとりの人としてしっかり向き合うことそのものなのです。

ときめきプロジェクトの核となるインタビューと原稿にまとめる活動をい

2022年度実施事業一覧

事業名	共催ほか関係機関	場所	実施日
■学校のソトでうでだめし			
テンダーさんの「その辺のもので生きる」オンライン講座			
・第9回 「鉄工を身につけて強力なストーブを作ろう」		オンライン	2022/6/5
・第10回 「きみのためのエネルギー。実用パラボラソーラークッカーを作って太陽熱で調理する」		オンライン	2022/8/21
・第11回 「交渉を学び、こころざしを護る」		オンライン	2022/10/2
・第12回 「生き物の輪に戻るためにドライトイレを作ろう」		オンライン	2022/12/25
・第13回 「当たり前を変えよう、大切なものを守ろう」		オンライン	2022/3/26
■地球講座			
・The LIVE「夜のリレー」 メルボルン・パース・広島・ソウル・上海をつなぐ2時間	企画制作：NPO法人ELP (Earth Literacy Program)	オンライン	2022/6/22
・The LIVE「夜のリレー」 北海道・ソウル・上海・メルボルン・コタキナバルをつなぐ150分	企画制作：NPO法人ELP (Earth Literacy Program)	オンライン、東京(対面)	2022/12/22
■多言語・多文化交流			
パフォーマンス合宿 in 広島(ひろしまPCAMP2022)	共催：NPO法人安芸高田市国際交流協会(AICA)、後援：安芸高田市、安芸高田市教育委員会、広島県教育委員会、協力：こどものひろばヤッチャル(東広島市)、ひまわり21(呉市)、びんご日本語多言語サポートセンター(福山市)、ワールド・キッズ・ネットワーク(呉市)、公益財団法人東広島市教育文化振興事業団	広島県 安芸高田市	2022/8/4～8/7
パフォーマンス合宿(オンライン版)×地球講座	助成：公益財団法人三菱UFJ国際財団、協力：NPO法人ELP (Earth Literacy Program)	オンライン	2023/2/25、26
PCAMPウェブサイトリニューアル			2023/3/31
■ときめき取材記			
『〈対話〉をつくる「ときめき取材記」プロジェクト報告書 2023年増補版』の制作 ウェブサイト運営			2023/3

※2022年度当初計画していた日露の教師・生徒交流プログラムは国際情勢により実施しなかった。

かに深めるかが学生の学びに大きく関わることから、TJFではプロジェクトに取り組む教師の方や興味をもっていらっしゃる方を対象に、インタビューや写真の撮り方の勉強会やセミナーを行いました。講師の一人は、聞き書きの名手といわれる作家の塩野米松氏です。塩野氏は、これまでに聞き書きの著書を数多く出し、多くの中高生に聞き書きの講習を行ってきました。TJFのセミナーは、塩野氏が一方的に話をするのではなく、参加者から質問を受け、それに対して回答をしながら話を進め、すべての質問と回答が終わったときに、人に話を聞くということ、そのために必要な姿勢などが伝わってくるというものでした。セミナーそのものが聞き書きの体験になっていました。

2016年に開始した本ウェブサイトに、学生が聞き書きをまとめた130本を超える記事が公開されています(2024年3月現在)。

塩野米松 〔聞き書き作家〕



聞き書きは作品づくりにとても手間がかかる。話し手に会いに行き、質問をし、自分の意見や感想を述べながら、話を掘り下げていく。それを全て録音し、文字に書き起こし、聞き手の質問を消し、話し手だけの文章を整理して仕上げる。これで話し手が読者に向かってしゃべっているようにできあがる。

対面で質問し、応えるから、互いの反応で自分が話した意味がわかってもらえたかどうかはすぐわかる。わかってもらえないようだと、説明を加える。または別の例を挙げる。ほとんどの人は質問されれば、応えてくれる。何の用意もなく始まっても、質問の意味を汲み取り、答えを話す。時には言葉にしたことがないものも出てくる。そのたびに昔のことや現場、動作、道具を思い出し、言葉にする。しゃべりながら自分はこんなことをして、こんなことを考えていたのかと気づくことも多い。聞き手は知らなかった話に驚き、心を打つ言葉に感銘を受ける。生の会話には心がこもり、感情が織り込まれ、次第に互いを敬うようになる。

画家が絵筆で絵を描き、彫刻家が鑿(のみ)で彫るように、聞き書きは質問で人物を描くものだと思っている。書面で送られてきた質問票に答えを書いて送っても、こうはならない。紙に書かれた質問には表情がない。理解、疑問、驚き、話すときの様子、動作、間、リズム。ほとんどが無意識のうちに出てくる。それに相手が反応する。一つの質問は答えが返ってくるたびに幾つもの質問を産む。もっと知りたいのだ。それは態度に表れ、更なる答えを促す。その人がどう生きてきたのか聞きたいのだ。

戦争の話、仕事、自然観、宗教に対する考えなど、目的を絞ってしまえばもう少し近道があるかも知れないが、誘導的な聞き方をしてしまうおそれがある。目的を定めると、効率を考える。人には目的を決めたときに「こう答えて欲しい」という気持ちがある。話し手はそれを無意識のうちに察し、それに添った返答をしがちだ。それが喜ばれるからだ。目的地を決めれば、できるだけ早くそこに着きたい。歩くより、自転車、もっと速い自動車……を考える。それではゆっくり歩きながらじっくり周囲を見渡し、草花や虫たちに気づくおもしろさがなくなってしまう。急ぐあまりまわりが見えないからだ。

聞き書きは歩いて目的地に向かうのに似ているかも知れない。



ときめき取材記プロジェクトの意義を含め、さまざまな実践9例の報告が、この報告書には収録されています。また資料も多く掲載されています。



【事業データ】
ときめき取材記ウェブサイト
2022年度掲載記事23本
『〈対話〉をつくる「ときめき取材記」プロジェクト報告書2023年増補版』の制作
仕様：B5版、93ページ

組織

評議員会 (任期: 一期4年)

評議員会長	野間省伸	株式会社講談社 代表取締役社長
評議員	金子眞吾	TOPPANホールディングス株式会社 代表取締役会長
	北島義斉	大日本印刷株式会社 代表取締役社長
	豊泉俊郎	三菱UFJ証券ホールディングス株式会社 名誉顧問
	長瀬眞	三菱地所株式会社 社外取締役
	船田高男	王子製紙株式会社 代表取締役社長
	馬城文雄	日本製紙株式会社 取締役会長
	山根隆	音羽建物株式会社 最高顧問

理事会 (任期: 一期2年) *は代表理事

理事長	佐藤郡衛*	東京学芸大学 名誉教授、目白大学 名誉教授
常務理事 (常勤)	水口景子*	
業務執行理事 (常勤)	鈴木律子	
理事	金丸徳雄	株式会社講談社 取締役副社長
	輿水優	東京外国語大学 名誉教授
	境一三	獨協大学外国語学部 特任教授

監事 (任期: 一期2年)

清水至	公認会計士
白石光行	株式会社講談社 常任監査役

(敬称略 五十音順 2024年4月現在)

事務局

事務局長	進藤由美
チーフ・アドミニストレイティブ・オフィサー	藤掛敏也
チーフ・プログラム・オフィサー	室中直美
シニア・プログラム・オフィサー	千葉美由紀 長江春子
職員	叶谷麻子 柴田幹子 沈炫旼 中野敦 宮川咲 森亮介

TJFを支援してくださっている方々

TJFは皆さまからご協力、ご支援をいただき事業を行っています。
2022、2023年度も下記の皆さまに支えていただきながら事業を進めました。
改めましてお礼を申し上げます。

賛助会員

〔法人〕

2022年度 >>> 王子製紙株式会社 鹿島建設株式会社 共同印刷株式会社 キングレコード株式会社
株式会社KPSホールディングス 株式会社広済堂ネクスト 株式会社光文社
株式会社国宝社 株式会社世界思想社教学社 株式会社第一通信社 大日本印刷株式会社
高尾丸王製紙株式会社 株式会社トーハン 図書印刷株式会社 凸版印刷株式会社
日興紙業株式会社 日本出版販売株式会社 日本製紙株式会社 日本図書普及株式会社
株式会社フォーネット社 二葉製本株式会社 北越コーポレーション株式会社
丸住製紙株式会社 丸紅フォレストリンクス株式会社 株式会社三井住友銀行
株式会社三菱UFJ銀行 株式会社彌生

2023年度 >>> 王子製紙株式会社 鹿島建設株式会社 共同印刷株式会社 キングレコード株式会社
株式会社KPSホールディングス 株式会社広済堂ネクスト 株式会社光文社
株式会社国宝社 株式会社世界思想社教学社 株式会社第一通信社 大日本印刷株式会社
高尾丸王製紙株式会社 株式会社トーハン 図書印刷株式会社 TOPPANホールディングス株式会社
日興紙業株式会社 日本出版販売株式会社 日本製紙株式会社 日本図書普及株式会社
株式会社フォーネット社 二葉製本株式会社 北越コーポレーション株式会社
丸住製紙株式会社 丸紅フォレストリンクス株式会社 株式会社三井住友銀行
株式会社三菱UFJ銀行 株式会社彌生

〔個人〕

2022年度 >>> 石井恵理子 市原徳郎 カイト由利子 高崎孝 高嶋伸和 細谷美代子 松井外恵
匿名希望2名

2023年度 >>> 市原徳郎 カイト由利子 高崎孝 高嶋伸和 細谷美代子 匿名希望2名

助成団体

2022年度 >>> 公益財団法人三菱UFJ国際財団
2023年度 >>> 公益財団法人三菱UFJ国際財団

寄付者

2022年度 >>> 株式会社講談社 秋保哲 内田憲孝 佐野実 小溪教材研究チーム 西堀勝仁 匿名希望1名
2023年度 >>> 株式会社講談社 秋保哲 内田憲孝 及川伊佐子 木村雄一 呉ロータリークラブ 佐野実
西堀勝仁

(敬称略 五十音順 2024年3月末現在)

事務局長交代のごあいさつ



進藤由美
新事務局長

東西冷戦の象徴であったベルリンの壁が1989年に崩壊して以降、「グローバル化」は加速度を増したものの、その流れはここ数年で大きな曲がり角を迎えています。この先どこへ向かっているのか、とすれば不安が大きく膨らむような事象が世界のあちこちで見られます。加えて、地球規模のさまざまな課題はもはや対岸の火事ではなく、自分事としてとらえる想像力と覚悟と行動が求められています。社会の多様化と複雑化、不確実性が進み、未来の予測が難しいとされている今だからこそ、対話や協働を通して他者理解を深めていくことが必要であると考えています。

TJFでは、若い人たちがさまざまな価値観と出会う学びの場を提供しています。自分とは異なる価値観との出会いや気づきは、わくわくする経験となります。またそれは同時に、自己理解への問いかけでもあります。すなわち、わくわくすることの裏返しとして理解しえないこと、納得のできない価値観との出会いもあり、もやもやすることもあるのです。このもやもやをそのままにせず、対話や協働を通して自己理解と他者理解を深めていくことで豊かな想像力とクリティカルな思考が育まれていきます。自分の物事の見方が絶対的ではないということを知ることは、他者との対話をより一層深めることにつながり、共感力を高め、新しい価値の創造へとつながっていきます。

既存の枠組みにとらわれない自由な発想で、さまざまなかたちの「学びの場」づくりを推進するためには、我々職員一人ひとりもまた、前例にとらわれることなく、寛容性を高めクリティカルな思考を涵養し、変容し続けることが求められています。

2024年1月より事務局長のバトンを受け継ぎました。新たなビジョン、ミッションのもと、未来を担う若者たちが互いを尊重し学び合う社会を創造できるよう努めてまいります。今後とも皆さまには、より一層のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



鈴木律子
事務局長

「今を生きる若い人たちに、私たちはどんな社会を手渡していくことができるのか」、2019年11月にTJFの一員となった際に私はこの問いを掲げました。それからの4年間を振り返りますと、2020年からの新型コロナウイルスCovid-19の世界的大流行、九州や静岡の豪雨災害、トルコ・シリア大地震、ロシアによるウクライナ侵攻、イスラエル・パレスチナ戦争、そして今年の年頭には能登半島で大地震が起き、想定もしなかった困難と混乱の在り様を目の当たりにする年月でした。この間に世界人口は80億人を突破し、地球環境の激変も話題に事欠きません。

新型コロナウイルスの影響でTJFも、教育現場をはじめ多くの皆さまと同様にオンラインでプログラムを実施することを余儀なくされました。事業をオンラインで実施することで得られるものは何だろうか、成し得ないことは何だろうかと職員共々頭を抱えつつ、一つひとつ時間をかけてチャレンジしてきた日々でした。

しかし一方で、オンラインによるプログラムにも多くのメリットがあることを確認することができました。国内外のさまざまな地域に暮らす参加者が文字通り「時空を超えて」パソコンやタブレットなどの画面に一堂に会し、ことばを交わし、オンラインならではの新たな表現手法に挑み、充実した時間をもつことができたのです。自分自身を見つめ、物事の本質を見極め、新たな関係性の構築に前向きに歩いていくこと、その経験を通じてより良い社会を創っていくのではないかと、希望の光を見いだすことができた実感しております。

TJFは昨年新たなビジョン、ミッションを掲げました。新事務局長とともに、これらを抛り所として、次のステージに向け一層充実したプログラムを展開することができることを願ってやみません。

日頃からTJFを支えてくださっている皆さまには改めて感謝申し上げますとともに、今後も変わらぬご支援ご協力を賜りたく心よりお願い申し上げます。

財団概要

設立

1987年6月22日
2011年4月1日、公益財団法人に移行

出捐企業

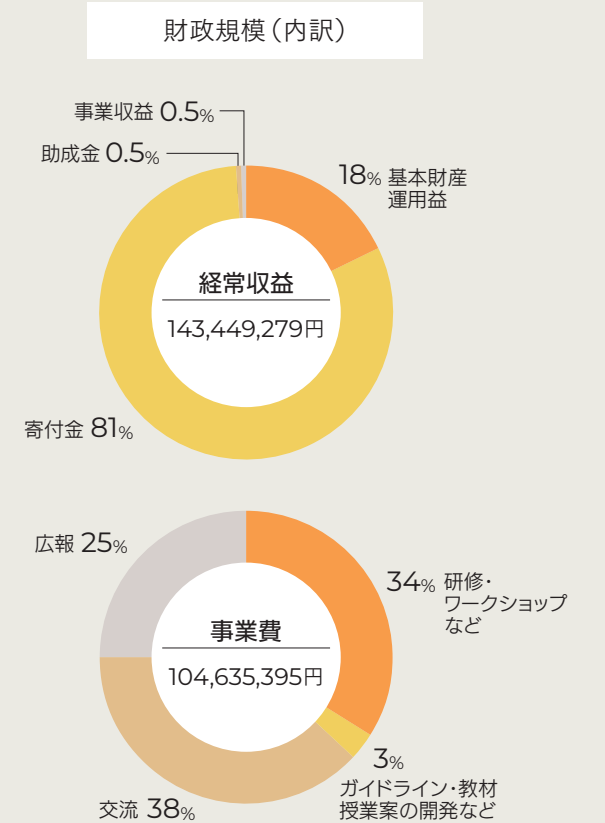
王子製紙株式会社 株式会社講談社 大日本印刷株式会社
TOPPANホールディングス株式会社 日本製紙株式会社
株式会社三菱UFJ銀行

基本財産

20億円

財政規模

2022年度の経常収益は1億4,344万円、
事業費は1億463万円でした。
内訳は右記の通りです。



サポートのお願い

TJFは、子どもたちが自ら未来を切り拓いていくための土台となるような学びと交流の場づくりを行っています。活動の趣旨にご賛同いただける方々に次のようなご支援をお願いしております。

寄付

TJFの活動全体に対する寄付、特定の事業を指定する寄付があります。

賛助会員

継続的な支援をしていただける方に。

〔年会費〕 法人会員一口：50,000円 個人会員一口：10,000円

寄付金につきましては、税制上の優遇措置が適用され、所得税や法人税の控除を受けることができます。ご支援くださる方々には、TJFが発行する印刷物を送付するほか、TJFが主催するイベントのご案内を差し上げています。

詳しくはこちらから



CoReCa

- 「人と **Collaboration** (協働) しながら、
Relation (関係) を築いていく。
TJFは人びとをつなぐ **Catalyst** (触媒) でありたい」
との思いを込めました。

公益財団法人国際文化フォーラム
事業報告

CoReCa2022-2023

2024年5月発行

デザイン 山本義明 (goldfish design)
校閲・校正 株式会社ココ出版
印刷・製本 TOPPAN株式会社

編集・発行 (公財) 国際文化フォーラム
〒112-0013
東京都文京区音羽1-17-14音羽YKビル3F
Tel 03-5981-5226
Fax 03-5981-5227
Email forum@tjf.or.jp



ウェブサイト



Facebook



Instagram

